研究論文

明治期日本における政治家ネットワーク形成
——品川弥二郎・京都尊攘堂人脈の分析から

池田さなえ

序章

本稿は、明治期日本の政治家を中心として広がる多彩な属性の人的ネットワークを可視化する方法を考案し、それをもとに明治期の政治における地方人士「組織」の問題に新たな視角を提示するものである。

そもそもこの研究は、政治指導者の地方人士「組織」という局面に対する根源的関心に発している。[1] 明治政治史において、この問題は政党の発達という文脈で考えられてきた。明治期の政党は、地方の利害を吸収する仕組みは未発達ではあったものの、「地方利益」を通じた限定的な組織が図られていた。[2] 政党の内部構造[3]や選挙制度上の条件[4]もさることながら、この時期の地方人士組織を考える上で最も重要な条件の一つは、地方人士の政治意識の問題、とりわけ強固な反政党意識の問題である。[5]

したがって、この時期特有の困難さとして、各政治勢力は「組織されたくない人びと」を組織しなければならないという無理難題に直面していたという点が指摘できる。同時に、もう一つの問題として、議会に与党を持たない藩閥政府の指導者は、自ら地方人士に何らかの形でアプローチしていく必要があったということ、そして藩閥指導者たちはたいていこの「組織されたくない人びと」に期待していた（あるいはするしかなかった）という困難もあった。しかしな

から、自由党を中心とする政党の組織に比して、藩閥指導者による地方人士組織の実態はほとんど明らかにされていない。

この問題意識は、高久嶺之介・伊藤之雄・小林丈広らが指摘する[6]、坂野潤治『明治憲法体制の確立』[7]における「自治党」理解の限界にも通じる[8]。藩閥政府の指導者に関する研究は中央政局中心の視点に偏りがちであり、地方人士の組織という局面が十分把捉できないのである。一方で、高久らの指摘は組織への視線へと昇華されることはなく、あくまで個別地方政治史的な指摘として受容された。

本稿ではこのような観点から、明治期、特に初期議会期における藩閥政府指導者による地方人士組織の問題を考えたい。そのためには、地方の組織化が不十分であった井上馨の自治党のみならず、その後の政治団体に結実した事例も含めて、多様なパターンを分析する必要があると考える。この観点において本稿で注目するのは、政社―国民協会、団体―信用組合の組織化を目指して全国をくまなくめぐり、自らの手足と耳目で組織することにこだわった政治家・品川弥二郎である。

ただし、ここでは国政に関する団体である国民協会のみを分析対象とすることは適切でないと考える。なぜならば、国政政党（政社）のみに焦点を当てることで、品川が把握しようとした「組織されたくない人びと」を見落としてしまう可能性があるからである。信用組合やその他の結合なども含め、品川が関わった全ての結合・人間関係を可能な限り析出する必要がある。

とはいえ、一人の政治家の広範にわたる人間関係を析出することは容易ではなく、何らかの軸足が必要である。本稿では、品川の地方人士組織の拠点として、品川の京都別荘・尊攘堂に注目する。地方人士を組織するにあたって、まず手近な郷里や別荘・別宅の所在地から着手することは一般的に考えて不自然ではない。実際品川は、腹心の平田東助とともに信用組合の日本での普及を進める際に、まず平田の故郷である新潟・米沢と自身の別荘地である栃木・那須から組織を拡大している[9]。尊攘堂は品川が政治的に脂の乗り始めた四五歳の時に購入し、最後まで所有していた重要な別荘の一つであり、まずはここから検討を始めることとする。

尊攘堂は、これまで政治家の邸宅・別荘研究で取り上げられる対象であった。明治政治史において、政治家の邸宅・別荘研究は決して主流とはいえないが、近年いくつか重要な研究が現れている注目の分野の一つであるといえよう。佐々木隆の先駆的研究は、政治家の別荘利用を政治的コミュニケーションとして読み解いた[10]。佐々木は、政治家にとっての別荘を、相手に対する政治的距離感・不快感・非協力・敵対などを表現・伝達するための場、あるいは政界の第一線を離れ、当面政局に直接・間接に関与しないことを表現するための場と考えた。そこには、政治家にとって別荘は本来保養・娯楽のためのものであり、政治の中心から「籠居」「退去」するもの

との認識が見える。このように佐々木の別荘に対する評価は、常に中央政界を主軸に据えたものになっている点が特徴といえる。

近年の注目すべき研究としては、佐藤信の『近代日本の統治と空間――私邸・別荘・庁舎』[11]がある。佐藤は、「全体の傾向を理解すると同時に個々の統治エリートの空間利用を仔細に観察することで各人の人物の指向と能力を推し量ることが求められよう」[12]という立場に立ち、明治～昭和にかけての政治家の邸宅を網羅的に分析した。その体系性において政治家の邸宅研究の到達点とも評すべき大著であるが、特に京阪[13]別荘のような東京から比較的離れた別荘の評価に関しては疑問が残る。佐藤は山縣有朋の第三次無鄰菴分析から「京都は基本的に非政治的な場であるという認識が共有されており、京都に滞在している限り政治的になりえなかった」[14]、「これらの京阪別荘地はたとえ統治エリートの別荘が置かれても、それが国家統治の文脈に於いて政治化することはなかった。……京阪別荘地は基本的には休養の場であった。……中央政界の喧噪から完全に隠れる地であった」[15]と論じる。このように佐藤もまた佐々木同様あくまで中央政局を主軸に据え、全国に広がる政治家の邸宅をある種の階層的秩序において捉える傾向がある。

そもそも佐藤の問題意識は政治家の邸宅の「国家統治」上における意義を問うものであるからこのような評価は一見妥当でもあるが、国家統治のための地方統治・地方政治という観点から見た場合、地方にはきわめて政治的な姿が見えてくる。[16]佐藤の分析視角においては、地方統治が「国家統治」でないかのようなミスリードを与えるおそれがある。[17]

佐々木・佐藤両氏の議論に共通して導き出される地域像は、「「お客様」から見た別荘所在地」といえよう。両氏において別荘所在地は、中央＝東京に対する従属的な存在であり、「統治エリート」たちは別荘所在地の政治・社会・文化には深くコミットせず、その空間の一部に「間借り」しているだけというイメージを前提としているように思われる。[18]当然この視角からは、別荘所在地を地方人士組織の問題から捉えようとする発想は生まれてこない。

以上のような研究史の中で独特の位置にあるのは、奈良岡聰智による一連の政治家別荘研究[19]である。奈良岡は「政治家の邸宅や公的な政治施設との関わり方には、その人物の個性や政治構想が端的に表れる」[20]として、大久保利通の「高輪別荘」については、果樹園や茶畑、桑畑が作られ「一種の「実験農場」の観を呈し」、殖産興業推進という彼の理念を体現するものであったと指摘する。[21]また西郷従道の那須別荘についても、「優雅に狩猟を楽しむというよりは、殖産興業政策の先頭に立ちつつ、「失われた故郷」を取り戻すための場でもあった」[22]という。このように、奈良岡は政治家の別荘について、「籠居」「退去」ではなく、「その地」「その場所」に置かれることそれ自体の国策的意義を積極的に評価する。この視点はきわめ

て重要であり、本稿ではもう少しこの問題を深めていきたい。

すなわち本稿では、中央―地方の階層的関係を前提とする政治家別荘研究の枠組みをいったん解体し、別荘およびその所在地を一つの観測点として地方人士組織の問題を検討する。それにより、帰納的に政治家別荘の持つ政治史的意義を考察することもできるだろう。

そのために、まずは「別荘」を核としたネットワークの把握が必要である。前掲の奈良岡による政治家の別荘研究でも別荘を中心とした人的ネットワークが描かれているが、エピソードの拾遺的な叙述になりがちであり、別荘を軸とした人的関係の強弱・濃淡や、ネットワークの全体像、その中での個々の人的関係の位置づけが見えにくく、本稿の課題に対しては十分有効な方法とはいいがたい。[23] これは政治史における人的ネットワーク叙述全般に当てはまる問題である。

そこで、「ネットワーク」そのものに焦点を絞った研究が次に注目される。美術史においては、芸術家を取り巻くネットワークの分析が一つの重要な関心となっている。並木誠士らは、京都帝国大学理工科大学・京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）にて教鞭をとった化学者・中沢岩太に関する史料群を用い、近代京都における美術工芸の作品や制作者を取り巻くネットワークを相関図で可視化した。[24] 並木らの研究では、一人の人物の史料群をベースとした大量史料処理が効果的であることが示された。しかし、人的関係の面的な広がりは相関図によって示されたものの、その強弱や濃淡といった観点も踏まえた把握が依然として難しい。単に「交流があった」というだけではないネットワークの強弱や濃淡を捉えることは、政治史・美術史の手法においては限界がある。

この点において、経営史におけるネットワーク分析は極めて多くの示唆を与えてくれる。鈴木恒夫・小早川洋一・和田一夫[25]は、戦前日本に特徴的な「共同出資の会社」の広がりに着目し、その会社グループの地域的広がり・人的広がりのみならずそのネットワークの強弱や濃淡をも明らかにした。[26]「企業家ネットワーク」を『日本全国諸会社役員録』を用いてデータベース化する彼らの手法は非常に実践的で、数量的把握の可能な方法を提示し、反証可能性を持っている。ただし、この方法は実業家の経済活動を通じたネットワークの分析に特化したものであり、政治的・文化的ネットワークのような、異なる属性の人間間の関係は析出できない。

このような中、きわめてユニークな方法を提示しているのが齋藤康彦の「近代数寄者ネットワーク」研究である。[27] 齋藤は、実業家の「茶会記」を大量にデータ処理し、政界・官界・実業界を横断する巨大なネットワークを析出した。齋藤は、経営史における企業家ネットワーク分析の手法を援用しながらも、異なる属性間の人的ネットワークを解析することに成功している。この研究は、単なるエピソードの紹介ではなく、史料をデータとして大量処理にかける

ことで人的ネットワークをより包括的・視覚的に把握可能にした点において、本稿が最も学ぶべき先行研究であると考える。

本稿では、この齋藤康彦の「近代数寄者ネットワーク」研究に倣って、京都尊攘堂に集った人びとについて複数のデータベースを構築し、これをもとに更に複数の図表を作成する。単純・機械的処理を積み重ね、それらを総合的に分析することを基本として、補足的に特筆すべき個別事例に関して叙述的アプローチを採用する。以上の方法により、一人の人物・特定の地域を舞台に展開されるネットワークを、より視覚的・立体的に捉えることを目指す。

以下、史料の引用に際しては、読みやすさを考慮して適宜句読点を補った。頻出する史料には、以下の略称を用いる。尚友倶楽部品川弥二郎関係文書編纂委員会編『品川弥二郎関係文書』第一～八巻（山川出版社、一九九三年・一九九四年・一九九五年・一九九八年・一九九九年・二〇〇三年・二〇〇九年・二〇一七年）→『品川文書』巻数、国立国会図書館憲政資料室所蔵「品川弥二郎関係文書（その1）書簡の部」「品川弥二郎関係文書（その1）書類の部」「品川弥二郎関係文書（その2）書簡の部」「品川弥二郎関係文書（その2）書類の部」→「品川文書1　書簡」「品川文書1　書類」「品川文書2　書簡」「品川文書2　書類」とし、資料番号を続けた。註に関しては、原則として一次史料の作成年は元号で、研究書・論文は西暦で表記した。書簡の年代は、収録されている史料集および筆者の推定に基づくものには丸括弧を付した。「カ」は著者による補注である。

第一章　京都尊攘堂[28]の概要――創設から売却・移管まで

まず、議論の前提として京都尊攘堂の概要を簡単に確認しておきたい。尊攘堂は一八八七（明治二〇）年三月に品川弥二郎が京都高倉錦小路にあった建物および敷地を購入して創設した、幕末維新期の「勤王」殉難志士の遺墨・遺品等を保存・展示し、祭祀・慰霊・顕彰をするための施設である。[29]京都に「尊攘堂」を設け、学派や身分を超えた教育機関とするという吉田松陰の遺志を継いだものとされる。尊攘堂では創設以降、禁門の変で久坂玄瑞をはじめとする品川の同志たちが戦没した旧暦七月一九日にあたる新暦八月二〇日頃にほぼ毎年彼ら殉難志士の祭典が、「頼政祭[30]」が毎年六月二六日に行われ、同時に堂内に志士の遺品や遺墨を展示し、参拝者に自由に縦覧させた。しかし、一日に数百から数千人の縦覧者が訪れ[31]、尊攘堂の敷地では狭隘を感じるようになったためか、一八九三年には祭場を東山霊山招魂社に、九六年からは天龍寺に移して執行された。

一日の祭典に数千人が訪れるというのは、一八七六年以来霊山招魂社で行われていた養正社を主体とする、より行政的色彩の強い殉難者招魂祭[32]と比べても、遜色ないばかりかこれに勝る規模でもあっ

た。養正社主体の招魂祭は毎年一〇月一四日～一五、六日に営まれた。尊攘堂祭典とは時期も慰霊対象も完全には重ならないとはいえ、一八八七年以来京都市内では類似の祭典が年によっては二度も行われていたことになる。九三年の招魂祭は、おそらく尊攘堂が母体となって開催された、養正社による招魂祭とのコラボレーションであろう。[33] 開催日が九月五日であることも右の推察を裏付ける。このことは、養正社とは設立経緯を異にし、全く一個人の関心から設立された尊攘堂が次第に認知され、既に存在した養正社主体の招魂祭を呑み込むほどにまで規模・動員力・注目度を拡大させたことを意味する。

一八九六年三月、京都在住の有志二〇名が「尊攘堂保存委員」（四一頁・表1★印）を結成し、「尊攘堂保存ノ旨趣」を発表し、賛同者の募集が始まった。[34] 一九〇〇年二月二六日に品川弥二郎が歿して後、同年一〇月尊攘堂保存委員は尊攘堂の京都帝国大学への移管を文部省に申請し、同月三〇日に土地建物は田中源太郎に売却される[35]（その後京都銀行集会所の施設となる）[36]。

その後、一九〇一年六月には野村靖・松本鼎・島地黙雷及び品川家と姻戚関係にある山縣伊三郎・山根正次・中村精男・平田東助のほか、「尊攘堂委員」三一名が連署し、京都帝国大学に対し、以後毎年一〇月二七日の松陰忌と二月二六日の品川忌の両日に祭典を営み、同時に収蔵品の展覧を行うことの許可を求め、認められた。[37] この時の「尊攘堂委員」は前述の「尊攘堂保存委員」メンバーとは若干の異同がある（表1☆印）。

第二章　尊攘堂関係データベースの概観

以上で確認した京都尊攘堂において、品川を中心としていかなる人的ネットワークが築かれていたのか。本章ではこの問題に迫るべく、これまで明治政治史において主に用いられてきた書簡のみならず、多様な史料を組み合わせて三つのデータベースを構築した。

政治家書簡は明治政治史において非常に多くの情報をもたらしてくれるものであり、これによって明治政治史は大きく前進してきた。しかし、書簡から見える事実がその人物を取り巻く現実であると錯覚してしまうことは、明治期を扱う政治史家が陥りやすい陥穽である。われわれは、書かれた文章による頻繁なコミュニケーションがなくとも深くつながった人間関係を持つことがある。逆に、書かれた文章を通じたやり取りが頻繁であることは、その関係がよりビジネスライクであることの表れである場合もある。一つの問題についてより多くの書簡のやり取りがあるのは、それが業務上間違いを許されない性質のものであるというにすぎず、その双方が特段親しいというわけではない場合である。こういった事柄をわれわれは日常的に知っているはずであるのに、明治の政治家について叙述する際

には、「〇〇と△△は、書簡のやり取りが頻繁になされているから親しい関係にあった」などと説明、または解釈してしまいがちである。

こうした問題を理解した上で、可能な限り品川を中心とした人的ネットワークの全体像に近づくためには、書簡のやり取りだけではないコミュニケーションの多様なあり方に注目する必要があるだろう。品川―尊攘堂においては書簡のやり取りのほか、大きく分けて金員寄付・物品寄付・参拝あるいは対面での接触という局面があった。このそれぞれの局面に対応した史料を駆使し、併せて限られた時期ではあるが残存する品川の日記も加え、以下の三つのデータベースを作成した。

一つ目のデータベース（ＤＢ１）は、尊攘堂における品川と様々な人びととの関わり方として、金員寄付・物品寄付・参拝という三つのあり方に注目して作成したものである。ＤＢ１はこの三つの関わり方に即して、以下の三つの表に分割される。尊攘堂への寄付者を寄付年月日順に並べ、経歴・肩書を他史料・研究から補った**表１**、物品の寄付者を一覧化し、表１と同様に経歴・肩書を補った**表２**、尊攘堂への参拝者抄録に新聞等から情報を補い一覧化した**表３**である。図表は全て文末（四一～七三頁）にまとめている。

二つ目のデータベース（ＤＢ２）は、『品川文書』等の政治家関係文書所収の書簡、日記、及び各種新聞から、[38] 品川が京都に滞在したことがわかる記述、京都から来客があったことがわかる記述、京都滞在中に寄せられた書簡、品川が京都以外に在る時に寄せられた京都に関する内容の書簡について全て書き出して日表化したものである。これにより、ＤＢ１とはまた異なる形の、尊攘堂での品川と人びととの関わりが析出できる。すなわちＤＢ２が示すのは、品川と祭典・参拝以外の局面で対面・書通により交流していたことがわかる人物である。これを一覧化したものが**表４**である。また、表１～４をもとに、尊攘堂における人的ネットワークを図示したものが**図１**、ＤＢ２をもとに品川の京都（尊攘堂）滞在日を図示したものが**図２**である。

三つ目のデータベース（ＤＢ３）は、品川が京都以外に在る時期の京都居住者との往復書簡点数、京都府外在住者との京都に関する内容が含まれた往復書簡点数をまとめたものであり、これを図示したものが**図３**である。

これらのデータベースからは、これまで政治史で専ら使われてきた書簡分析で見えてくる人的関係とはかなり異なった世界が浮かび上がってくる。また、それぞれの表ごとの特徴もある。以下ではこうした点をそれぞれ分析していく。

なお、史料上に登場する人物間関係を分析する手法としては、社会学等でよく用いられるテキストマイニング、人名リポジトリやＬＤＡ等を用いたデジタルヒューマニティーズの手法があるが、[39] こ

れらは書簡や日記等のまとまったテキスト史料の分析には適しているが、それらに登場しない重要な人間関係も含めた質的・量的にバランスのとれた分析には現在のところ適していないように思われる。今回はこのような課題を認識したうえで、可能な限り複数の多様な形態の史料を用いることで人びとの品川―尊攘堂との様々な関わり方に光を当て、一つの平面上で複合的な人物間関係を把握する方法を考案した。後日書簡や日記のフルテキスト化が完成すれば、DB2についてはより精緻な分析が可能になることは付け加えておきたい。

第三章　尊攘堂を支えた人びと
――尊攘堂への寄付者・参拝者・その他関係者概観

以上のように本稿で用いるデータベースについて概観した上で、次にこれらの分析に移りたい。本章では、DB1から作成した表1～3、およびDB2から作成した表4を概観する。なお、各表の人名に付した記号については、★は一八九六（明治二九）年に尊攘堂保存委員となる者、☆は尊攘堂の京都帝大移管後に尊攘堂委員となる者、◎は『品川文書』「品川文書1　書簡」「品川文書1　書類」「品川文書2　書簡」「品川文書2　書類」に来翰のある者を示す。

まず、尊攘堂への金員寄付者を一覧化した表1を検討したい。尊攘堂への金員寄付者に関しては別稿で詳細に検討している[40]ので、ここではその結論のみを要約する。そこでは、①人数・寄付額の両面において維新志士経験者や遺族たちは中心的な寄付者ではなかったこと、②これに対し、尊攘堂の活動が成り立っていたのは実業家の出資によるところが大きかったこと、③特に阪神間の実業家による貢献が大きく、その大半は住友家・光村家などの数人の大資産家によって占められていたこと、④京都においては、比較的富裕で維新後海外貿易や外国人相手の商売を積極的に展開しようとする商工業者・芸術家たちによって支えられていたこと、⑤彼らの中には特に朝廷と関係の深い特権商人としての由緒を持ち、幕末には「勤王」経験も共有する商工業者や芸術家たちが目立つこと、⑥彼ら京都の商工業者は、商業会議所や市会において中心的勢力を占めた内貴甚三郎・浜岡光哲・田中源太郎らのグループとは企業活動において全く異なるグループに属していたこと、⑦これらの人びとはそれぞれ個別に尊攘堂とつながっていたのではなく、品川を介して、あるいは共通の関心から相互に結びつき、縦横無尽の全国的ネットワークを形成していたこと、⑧品川は、幕末に実際「勤王」家として活動していた者もそうでない者も、また幕末の「勤王」経験がどのようなものであれ、ともに参画できる懐の広い概念として「勤王」を読み替え、その新しい「勤王」概念が経歴や階層などの属性の異なる多くの人びとを尊攘堂に結集させた核であったこと、を指摘した。

これに対し、表2や表3に見える人物は表1に見える人物とはやや毛色が異なる。まず特徴的なのは、京都画壇の人びとである。尊攘堂への金員寄付者一覧にも富岡鉄斎の名は見えるが、表2には森寛斎や久保田米僊の名も見える。寄付者ではないが尊攘堂には神坂雪佳の絵も残っている。これは神坂が若き日に品川の恩顧を受けて実際に尊攘堂に寄寓していたためであろう。[41] 森寛斎と品川の交流は特に盛んであった。品川は京都の書肆・文求堂主人の田中治兵衛[42]を通じて森家の家政を一時的に管理していたほか、寛斎が品川から借金をしたり、品川留守中の尊攘堂及び品川の息子・弥一の様子を見守ったりしている様子が書簡で頻繁に報告されている。[43] 品川の明治二七年七月七日から一〇日までの滞京（図2参照）は、同年六月に亡くなった寛斎の墓参と森家の家督相続の会議に出席するためであったことからも、品川は森家の家政にまで深く関与する立場であったことがわかる。品川は、富岡鉄斎とも「勤王」経験[44]の共有から親交があったことは知られている。おそらく品川はこの辺りから京都画壇の人物とも交わるようになったものと思われる。

金員寄付者では中心的な位置を占めていなかった維新志士経験者や遺族も、物品寄付においては注目される。特に田中光顕とは、御料地運営方針では対立することもあった[45]が、幕末はむしろ品川の最も近くで交流していた人物の一人であり、[46] 維新の顕彰活動では密接なつながりを維持していたことがうかがえるのは興味深い。このほか、古書店主や好古家といった人びとが目立つ。

以上を要するに、物品寄付者ネットワークは尊攘堂所蔵史料の仕入れ先であったがゆえに、古美術に関する情報を保有すると思われる人びとや維新経験者や遺族が主な構成員となっているものと思われる。

「勤王」の画家・森寛斎や富岡鉄斎などを中心として尊攘堂に集った京都画壇の画家たちに関しては、品川との個人的関係からの説明のみならず、尊攘堂を「「勤王」というテーマで集められた古美術陳列場」と見ていた可能性を指摘したい。尊攘堂に収蔵されていた志士たちの遺墨や遺品は、今日では古美術品としての値打ちが高いものでもあるが、当時においても「勤王」という付加価値の付いた「近代芸術」であった可能性がある。近世以来文人世界では、書画会や漢詩文集・書画譜の刊行、古器物の鑑賞・陳列を通じた幅広いネットワークを形成していた歴史があり、[47] その文人ネットワークの中には、歴史的な出来事への幅広い知的好奇心を原動力とするサークルもあった。[48] 特に京都では、「文化サロン」を形成した有力商人らが漢詩・書画・史論を楽しみながら物心両面で「勤王の志士」たちを援助していたことが知られている。[49] 寛斎や鉄斎のような「文人画家」と呼ばれる芸術家たちはそうした文人文化の中心にいたし、品川など明治中後期に活躍した政治家もまたこの文化の中で成長した者たちであった。以上のことを考え合わせるならば、尊攘

堂は近世以来の文人サークルの交流の場として既に定式化しつつあったものの特徴のいくつかを継承しており、一部の文人的な文化の中に生きている人びとにとっては、尊攘堂はこの近世以来の文人サークルの系譜上にあるものと位置付けられていたとも考えられる。[50]

このようなネットワークは、品川との個人的な縁故のほか、品川自らが古書店等に出向いて遺墨等を探し求めたり、[51]尊攘堂での祭典をきっかけとして一般参観者の中から寄付の申出がなされたりする[52]中で徐々に形成されたと思われる。

表3は、尊攘堂への参拝者のうち史料から判明する者を一覧化したものである。寄付者は基本的に来堂の上寄付を行っていると思われるが（送金等により行う場合もあり）、[53]表3の参拝者は特に新聞や公式記録に残っている場合のみ摘出している。表3に見える参拝者は、表1に見える金員寄付者、表2に見える物品寄付者との重複もあるが、どの表にも名前のない政府や府県の高官や在野の人びとの名もある。その中には、品川との政治的立場が比較的遠いと考えられている岡崎邦輔のような人物も見える。

注目すべきは、山本復一・高木文平・山本章夫といった本草会ネットワークである。彼らはいずれも尊攘堂祭典日に参列者として新聞に名前が記載されている。彼らは、江戸時代において本草会に集った博物学者であり、[54]本草会は先に見た書画会等を通じた文人サークルと並んで近代における博覧会受容の前提として評価されている。この点に鑑みれば、尊攘堂祭典は、珍しい物品を陳列するという意味における博覧会との相同性から、彼らの好奇心をかきたてるものであったと考えられる。そして、それゆえにこそ表3に見える人物の多くは祭典や参拝日以外の日常の中での尊攘堂やその主人・品川との関わりがほとんど確認できないのかもしれない。

尊攘堂に参拝という形でのみ関わる人びとは、総じて品川―尊攘堂に対して比較的ライトな関わりを有する人びとであったと考えられる。それでも参拝すらしていない人びとに比べると、品川―尊攘堂とは何らかの接点や共通項があったと考えてよいだろう。

最後に、表4を検討する。表4は、DB2に登場する人物、すなわち品川との発受信書簡や品川の日記、新聞等に名前の見える人物のうち、品川と直接・間接に関わりがあったと判断できる者のみ登場する順に抽出し、第三者として名前の挙がっているだけの人物は省略したものである。品川親族も省略している。使用した史料が書簡や日記、新聞等これまでの品川を扱った研究、特に政治史研究が依拠してきた史料であることから当然ではあるが、表4からは概ねこれまでの研究で知られてきた「品川人脈」が見えるが、それだけでもない。

以上、表1～4を概観してきたが、以降は表1～4に列挙された人物、すなわち品川と京都尊攘堂において何らかの関わりのあった人物のうち、史料上名前の見える人物たちの織り成す人間関係の網

の目を、「品川―尊攘堂ネットワーク」として更に考察を進めていくこととする。

第四章　複合的指標による「品川―尊攘堂ネットワーク」分析

品川の京都尊攘堂人脈を明らかにすることだけが目的であればここまでの分析でも十分だが、これらのデータから見えてくる人びとと品川との関係はまだ平面的で、それぞれの強弱や濃淡、それら相互の重なり等は十分把握できない。そこで、本章では更にこうした品川―尊攘堂との多様な関わり方を一つの基準のもとに統合し、品川―尊攘堂との関係の強弱や濃淡、重なりを可視化するためにいくつかの作業を行う。この作業により作成されるのが、図1-1～8である。

品川に言及する研究は、一般に政治史[55]がよく知られているが、この他にも宗教史[56]、経済・産業史[57]、技術史[58]、美術史[59]など多岐にわたっている。以前筆者は何度か指摘したことがあるが、政治以外の領域における品川の活動は地方において多くの人びとと関わるものが多く、地方人士の組織化を考えるという関心においてはむしろ政治史以外の研究において蓄積されてきた知見がきわめて重要になる[60]。しかしながら、関わる地方人士が多岐にわたり、かつ膨大であるため、全体を概観し総合的分析を行うことは困難で、これまで誰も着手してこなかったものと思われる。

本稿は、これを各「拠点」ごとに把握可能にするための一つの試みである。これまでの研究で指摘されてきた品川の活動のうち、政界・官界での活動（宮内省御料局も含む）、経済・産業界（技術面含む）における活動、宗教界における活動、美術・文化方面での活動における人脈[61]が、特に京都尊攘堂という場においてどのように表れてくるのか。これを明確に可視化するための方法として図1-1～8を作成し、これらの図の全体を「品川マトリクス」と呼ぶ。今後、この「品川マトリクス」を京都尊攘堂以外の様々な拠点において作成することで、品川を中心とする人的ネットワークの総体を示すことができる。

「品川マトリクス」の作成方法は以下の通りである。まず、「品川―尊攘堂ネットワーク」を、維新経験・官歴という二つの基準で四象限平面に配置する。これが図1-1である。これを「品川マトリクス」の基準マトリクスとする。これは、表1～4の各人物について、尊攘堂という場の本来的目的と関わって最も重要な要素と思われる「維新経験」、およびこれまで最も注目されてきた品川の属性である政治家・官僚としての経験の二点において、品川との関係を把握するためのものである。

まず、各人物を以下の基準で点数化し、四象限平面に分布させる。

「維新経験」
→ある
→長州出身で維新期に品川とともに尊王・倒幕のために活動した、または戦闘に協力した経験がある、及びその遺族・親族：一〇点
→他藩で尊王・倒幕のために戦った、あるいは長州で一時期（最末期）に戦闘に参加・協力した者、及びその遺族・親族：八点
→他藩・地域で「勤王」派として活動した、あるいはその遺族・親族・後援者：五点
→なし／確認できない：〇点

「官歴」＝「内閣・各省での経歴の接点」
→ある　農商務省／内務省（一八七六〔明治九〕～八一年、一八九一～九二年）／宮内省・御料局（地）／第一次松方内閣
→品川の上官・同僚（内閣の場合は閣員、主要国家機関の長を品川と同時に務めた者を含む）・下僚であり、かつ直接のやり取りがある：五点
→品川の上官・同僚（内閣の場合は閣員含む）・下僚であるが、直接のやり取りが確認できない／品川の直接の上官・同僚・下僚ではないが、品川の影響力の大きい政府機関に在籍している（いた）／御料地関係者・神官[62]：三点
→なし／確認できない：〇点

各人物名の先頭の番号は、それぞれ表1～4のいずれに登場するかを示す。重複して登場する者は複数の番号を冠している。人名から人物や肩書を特定できなかった者はひとまず（0、0）の位置に配置した。

この基準マトリクスをベースに、品川の在野での活動として重要と思われるいくつかの指標を落とし込んで作成したのが、図1-2～8である。まず、先述のように品川はこれまでの研究で、政治・経済・産業界（技術面含む）における活動、宗教界における活動、美術・文化方面での活動が指摘されているので、これらの分野での人脈を反映するキーワードとして、「真宗関係」「信用組合」「五二会[63]」「国民協会」を措定し、DB1・2をもとにそれぞれに関係する人物を判明する限りで基準マトリクス上に網掛けをする。これらのキーワードは、いずれも品川の地方人士組織と何らかの関わりを持つ。網掛けの基準は、品川存命中にその団体と何らかの形で関わっていたか否かとする。こうしてできるのが図1-2～5である。

これに加えて、組織と明確な関係は見出せないかもしれないが、品川家との個人的関係がわかるキーワードとして筆者が注目している「品川家農牧場関係」を網掛けにしたのが、図1-6である。表

1には品川の栃木・那須農場関係者の名前が散見される。研究史上あまり注目されてこなかった視点ではあるが、後日京都尊攘堂における人脈を品川の他の別荘・別邸におけるそれと比較検討するためにも確認しておく必要があると考えたためである。また、近年筆者は品川の美術方面での人脈についても指摘しているが[64]、美術・文化人脈が見えやすいキーワードとして、パトロネージ関係を把握する「支援被支援関係」も措定した。これらを表現したのが図1-7である。ただし、ここでの「支援被支援関係」は美術・文化方面に限定していない。最後に、品川と尊攘堂を考える上で排除することのできない要素として、郷里・山口の存在に注目した。品川が組織する様々な団体も、結局のところ山口県人脈で説明されるものなのではないかという点は重要な問題である。したがって、図1-8で山口出身者についても網掛けにした。

これらの図に登場する人物は相関関係で結ばれる者も多いが、相関図化すると図がかなり複雑化し、却って人間関係が読み取りにくくなることをおそれ、今回はあくまで品川―尊攘堂との関わり方の図示を優先した。ここに示された人物間の相関関係に関しては、特筆すべきもののみ本文中に叙述することとする。

さて、こうしてできた「品川マトリクス」を考察していく。表1～4により図上の人物に関する情報を補いながらご覧いただきたい。まず基準マトリクスである図1-1では、維新経験と官歴による四象限平面なので当然ではあるが、品川と同郷出身（あるいは郷里で青年時代をともにした者）で政官界での経験を共有し、政治史上しばしばその往復書簡が利用されてきた人びとが第一・二象限に位置する。しかし、そのような人びとはむしろ少数で、圧倒的なのは第三・第四象限の在野の人びとであることは注目すべきであろう。

ボリュームゾーンは主に四つある。まず、維新経験があり官歴は共有しない人びとである。これはその程度により三つの山に分かれる。これらの人びとに関しては、品川や尊攘堂に近づく動機は理解しやすい。一方で、ボリュームゾーン左端の第三象限に位置する維新経験のない人びとが全体の半数近くを占めているように見えることにはより注意が必要である。とりわけ①の人物＝金員寄付者が多い。中でも特に全国レベルの大資産家、実業家、京都の富裕な商工業者が目立つ。

そのほかに注目すべきは、ボリュームゾーン右端＝第四象限に③・④の人物が多いことである。これは、参拝者および書簡・日記等から作成されたDB2に登場する人びとであるから、ここからは維新経験がある者は品川との直接対面・書面でのつながりを持つか、尊攘堂に参拝するという形で品川―尊攘堂と関わりを持つ傾向が大きかったことが確認できる。

次に、図1-2～7を見ていきたい。図1-2は真宗関係者を網掛けにしたものである。真宗（特に本願寺派）関係者は、品川の組織

においてきわめて重要な存在である。品川は、自らも居士[65]として信仰する浄土真宗本願寺派の勢力を高く評価していたが、串山まゆらの研究により、大洲鉄然ら本願寺派役僧が品川の指導する国民協会の支持勢力となり、全国に広がる巨大な門徒ネットワークを利用して選挙協力をしていたことが明らかになった[66]。図1-2では第三・四象限に真宗関係者が集中している。特に、僧侶（法主も）は第四象限に集中している。これは、西本願寺が禁門の変で落ち延びた品川ら長州藩士をかくまったこと、長州の本願寺派僧侶が幕末の萩藩諸隊に加わって幕長戦争に参戦したことを反映している。本願寺派役僧は国民協会の重要な支持母体であり、品川には常に連絡を取り合い、密接な関係を維持していく必要があったと考えられるが、図1-2からは、その拠点が本山所在地でもあり有力門徒も集中する京都であったことが示された。

一方で、門徒は第三象限に集中している。このことは、門徒であることが、維新経験がない場合の品川―尊攘堂とのつながり方の一つになっていたことを意味する。門徒であることが明らかな人物は、川島甚兵衛、高井幸三、芝原嘉兵衛、今井磯一郎、片岡政次、阿部市郎兵衛、中西牛郎、伊藤長次郎、門徒の出資で設立された真宗信徒生命（株式会社）、および第四象限の豊永長吉・桂弥市、山根信成である。川島は美術織物制作者[67]、高井・芝原・阿部・伊藤・豊永・桂は実業家であり、ともに真宗信徒生命の株主でもあった[68]。特に阿部は本願寺派の会計にも顧問的存在として関与できる立場にあった。山根は萩藩出身の軍人で本願寺派の篤信者[69]、中西牛郎は本願寺派と関係の深い宗教系ジャーナリストである[70]。今井は僧侶を遊軍として選挙戦を戦った三河の政治家であり、真宗系を支持母体としていると思われるが本願寺派であるかは不明である[71]。

豊永・桂・山根は品川と同郷であるが、それ以外の人物は品川と信仰を同じくするという以外には明確な共通点が見出せない。しかし、そのような実業家や美術工芸家が尊攘堂において品川と結びついていたことが示されたという点が何より重要であると考える。京都や阪神間の実業家・商工業者等は数多いる中で、なぜ特に図1に見えるような人びとが品川と結びついていたのかという問題を説明する一つのキーワードが「真宗」であったということを意味するからである。このことは、信仰を同じくすることが属性の異なる人びとの取引コストを大幅に低減していた可能性を示唆する[72]。このように考えれば、図1-2に着色のない他の実業家や美術工芸家等も真宗に信仰を有する人物であった可能性は十分に想定できる[73]。

図1-3は、信用組合関係者を網掛けにしたものである。これはまさに、品川の地方人士組織が京都においてどれほどの広がりを持っていたかを示す重要な指標となる。品川がその議会通過を見届けるようにして亡くなった一九〇〇年の産業組合法以前に設立されていた信用組合は決して多いとはいえない[74]ので、図上に網掛けでき

る人物はあまり多くはならないことが予想されたが、果たして京都尊攘堂において信用組合関係者と明確にわかる人物の数は少なかった。しかし、組織化の過程を拠点から考える本稿の関心においてはきわめて重要な以下の点が指摘できる。

まず、数は少ないが第三象限に信用組合関係者が存在していること、そしてその人びとは京都の美術商・美術工芸家、阪神地方の実業家であるということである。これは従来の信用組合に関する研究ではほとんど注目されてこなかった事実でもある。信用組合に関与するということが、維新経験のない人びとの品川―尊攘堂とのつながり方の二つ目のパターンであったということが見て取れる。

より詳細に見ていこう。平田東助は品川とともに信用組合の日本への普及を進めた人物であり、高井幸三は大阪府三島郡如是村信用組合の組合長[75]を勤めた人物、池田清助と真宗門徒でもあった川島甚兵衛は、後に品川や平田の指導を仰いで明治三三年一月に美術信用組合を組織している[76]。高井は先に見たように真宗有力門徒でもあるから、真宗への信仰と信用組合のどちらの要素から品川―尊攘堂と結びついていたのかは不明だが、少なくとも信用組合が一つの接着剤となり品川―尊攘堂ネットワークを形成していたと言うことはできるだろう。美術信用組合の例は、尊攘堂を軸とする非公的・文化的ネットワークから品川が普及を進めていた信用組合結成に至った事例と考えられる。図には網掛けのないの美術工芸家も存在する。これらの人物も信用組合に所属していた可能性は残るが、現時点ではこれ以上のことはわからなかった。

図1-4は、国民協会関係者を網掛けにしたものである。これは、品川の組織化の中でも政治史上最も注目されてきたものである。図1全体の中でも網掛けされた人物数が多いことが見て取れる。特に、第三・四象限に国民協会関係者が集中していることがわかる。図1-2と照らし合わせると、真宗関係者の割合が大きいことは注目される。前述の通り、真宗勢力が国民協会の支持母体であったことは串山により夙に指摘されてきたところであるが、この図により京都尊攘堂における人的ネットワークの中での表れ方が初めて可視化された。同時に、判明している数は少ないが、山口の上田実・岐阜の細井金四郎等京都から見て遠方の人物も注目される。これは、国民協会への支持を一つの接着剤として、全国の人びとが尊攘堂に結集していたことを意味する。

図1-5は、五二会関係者を網掛けにしたものである。「五二会」とは、註63にも示したが、前田正名と京都の在来産業家らを中心に一八九四（明治二七）年に結成された、在来産業・美術工芸品の高品質化・生産強化・輸出拡大等を目指す団体およびそれらの開催する大規模品評会の名称である。その名に冠された「五」は織物、陶磁器、漆器、金属器、製紙の五品を、「二」は雑貨、敷物を指す。「五二会」で網掛けにした者のなかには、指導者・前田正名個人と

の関係のみ有する者も含む。

五二会は前田正名が組織したものであり、品川や尊攘堂とは無関係なのではないかと思われるかもしれない。しかし、品川と前田との関係は明治一〇年代の農商務省時代以来の根深いものである[77]一方で、一八九〇年に品川が前田を農商務省から放逐する手助けをした[78]ことから両者の関係性には疑念も残ること、そして表1～3にも五二会関係者が何人か見えることなどから、これを全体の中で確認しておく必要があると考えた。

図1-5を見ると、四象限全体に満遍なく五二会関係者が位置していることがわかる。特に京阪神地域の商工業者、中でも京都の商工業者が目立つ。尊攘堂においては既知の品川―前田関係が前田の組織する五二会人脈を品川に結びつけていたと思われる事例と、逆に「品川―尊攘堂ネットワーク」が媒介となって前田―五二会に結びつけられていたと思われる事例の両方が確認できる。これもまた、維新経験のない人びとの品川―尊攘堂とのつながり方の一つであったことがわかる。

図1-6は、品川家農牧場関係者を網掛けにしたものであるが、第三・四象限に少数だが品川家の農牧場関係者が集中している。そしてその半数ほどは真宗関係者と重なっていることが大きな特徴である。これにより、品川と真宗関係者との関係が相互依存的なものであったことが示された[79]。また、品川家の別荘関係者はその所在地を超えて横断的に結びついていたことも示された。

図1-7はやや複雑なので説明を要する。品川に対して、あるいは品川を介して、もしくは品川を介さず、同一平面上の人物に対して支援者の立場にあったことが明確にわかる、あるいはそのように思われる者には網掛けを付した上で太枠で囲んでいる。品川から直接に、あるいは品川を介して、もしくは品川を介さずに、同一平面上の人物に対して非支援者の立場にあったことが明確にわかる、あるいはそのように思われる者には網掛けのみを付している。そして、同一平面上の人物や品川に対して支援者・非支援者のいずれでもあったことが明確にわかる、あるいはそのように思われる者は太字にし、下線・網掛けを付したうえで太枠で囲んでいる。先に図1を相関図化することは難しいと述べたが、この指標のみは相関図に近い意味合いも持つ。

図1-7からは、主に第三・四象限に支援被支援関係が見える。母数が少ないので信頼できる観察ではないかもしれないが、傾向として第四象限＝維新経験がある方が被支援者になりがち（但し真宗関係者を除く）であり、第二・三象限＝維新後に品川と知り合ったと思われる実業家たち（特に住友系）が支援者になっていることがわかる。第三象限の中でも、美術工芸作家は制作の関係上被支援者になりがちだが、尊攘堂には高額寄付をしている者が目立つことも指摘しておきたい。

より細かく見ていくと、住友家・光村家といった関西財界における大資産家一族・関係者や静岡の名望家・金原明善は品川を介して川島甚兵衛を金銭的に支援していたこと[80]、住友家・光村家は品川自身へも金銭的支援を行っていたこと[81]、長府（現山口県下関市）実業界の豊永長吉は品川を介して真宗役僧、特に大洲鉄然に金銭的支援をしていた[82]一方で、図1-6の説明で触れたように品川自身が僧侶や法主から助けられることもあったこと、井上馨が品川の農牧場に対して資金面で支援者となることもあったこと[83]、などが図上に表現された。以上の諸事実は、多くの隣接領域の研究において重要な知見となることが想定されるものでありながら、一例一例を論文化することには困難を伴う。これを一覧可能な形にできたことは一つの成果として強調しておきたい。

図1-8は山口出身者を網掛けにしたものであるが、もっとも網掛けの多い図となった。特に維新経験のある人びと＝第一・四象限に集中している。このことは、尊攘堂の成立を考えれば当然の結果ではある。一方で、網掛けされた人物は第三・四象限に多いことも注目される。尊攘堂に集った人物は、政府の高位高官者だけではなく、品川の下僚や品川と官歴を共有しない人物も多いということが示された。

細かく見ていくと、これらの人物は軍人・中央の下級官員・地方の中下級官員であることがわかる。品川との直接の関係を示す史料は見出せなかったが、官員に関しては、品川が若手の任官の世話をし、その後も長らくその動向を見守っていることがわかる[84]ことから、彼らもまた品川の力で官途に就いた人物ではないかと推察できる。これらの人びとは、品川への恩義が尊攘堂とつながる共通の動機であったと考えられる。軍人に関しては、山口出身者は陸軍軍人の途へと進む者が多かったことが知られているが、陸軍人事に品川の影響力が及んでいたと考えるよりは、幕末の諸隊での戦闘経験から軍人に進むという自然なキャリア形成が想定されることから[85]、品川との幕末の戦闘経験の共有が尊攘堂に関わる大きな動機であったと考えられる。そしてやはりここでも真宗関係者との重なりが注目される。

全体を通して「品川―尊攘堂ネットワーク」には、尊攘堂の所在地である京都のみならず、全国から多くの人びとが結集していたことがわかるが、特に網掛けの重なりや付された番号・記号の多い人びとには京都在住者が多かった。最も熱心な品川―尊攘堂サポーターである尊攘堂保存委員（のち、尊攘堂委員）は、「維新経験」軸の極点にある人物だけではなく、各指標における色や番号・記号の重なりの大きい人物から生まれている傾向が見て取れた[86]。このことからは、維新経験において品川と特に共有度の大きい人物のみならず、明治以降の品川との活動域の重なりが大きい人物が、「品川―尊攘堂ネットワーク」の中核であったと言ってよいだろう。そして

これが、真宗関係者や京都の商工業者・美術工芸家であった。

以上、「品川―尊攘堂ネットワーク」をマトリクス化することで、品川―尊攘堂を核とするネットワークの全体像やグラデーションを一通り把握することが可能となった。作業によってはかなり思い切った操作をしたところもあるので、それによって零れ落ちてしまう現実もあるかもしれない。また史料的限界もあり、十分厳密に実態を反映したものとはいえないことも断っておかねばなるまい。筆者の能力の限界もあり、品川及び尊攘堂との深い関係があった者を見落としていることもありうるだろうし、新たな史料や事実の発見によってこの人びとの配置や網掛けにも変動はあるだろう。しかしその可能性を含めても、かなり実態に近づくことはできたのではないかと考えている。品川―尊攘堂との様々な関わり方をさしあたって一つの基準で統合し、その関係性の強弱や濃淡を曲がりなりにも一覧できたことで、今後の様々な研究において不十分ながらも一つのたたき台にはなるだろう。今後は、この「品川マトリクス」中の人物それぞれについてより深く掘り下げ全国的な悉皆調査をし、品川の関わった地方人士の総合事典様のものを作成することが求められる。

第五章　経時的分析

ここまでの分析は、実は経時的視角を欠いているという弱点がある。しかし、以上の方法を応用し、年次ごとに「品川マトリクス」を作成することによって経時的変化の把握は可能である。ただ今回は紙幅の都合もあるのでこの分析は行わず、差し当たって品川と京都との関わり方の経時的変化を概観できるもう一つの重要なデータを提示する。各年次ごとに品川マトリクスを作成する作業はいずれ必要であり、それによってまた新たに多くのことが言えるであろうことは間違いないが、今回はそれ以上に端的に品川にとっての京都尊攘堂の政治史的位置づけが読み取れる経時的データの方に注目したい。

本章では、品川の京都尊攘堂との関わりを日表化したＤＢ２から品川の京都滞在日を分析して図式化した**図2**、および品川の京都関係発受信書簡点数をまとめたＤＢ３をもとに作成した**図3**を使用する。

まず、図2からは、品川の京都滞在が一八八七（明治二〇）年・八八年・九三年・九五年・九九年後半～一九〇〇年初頭に集中していることがわかる。一八九三年・九五年は品川の日記が残っており、その行動がより詳細に明らかになるので、これを**表5～7**にまとめ

た。これを見ると、品川は尊攘堂に滞在している間は堂創設の目的である祭典の準備や書類の整理に加え、図1に見える商工業者たちや真宗関係者、美術工芸家との面会等できわめて多忙な日々を過ごしていたことがわかる。その中には各地の実業視察や地方官・国民協会員との接触なども確認でき、とても単なる保養とはみなしがたい。つまり品川の滞京は京都の様々な領域における有力者との既存の人的関係の維持に加え、それまで全くあるいはほとんど接点のなかった地方人士の把握や、彼らの要望・潜在的課題の視察という意味合いを濃厚に帯びた機会であった可能性が指摘できる。これらはいずれ将来の組織化には欠かせない基礎作業となるものと考えられる。

一方で、一八八九、九〇、九一、九二年前半、九四、九六〜九九年前半には京都滞在をしていないこともわかる。これらの時期に品川が何をしていたかを書き出すと、一八八九年五月一三日〜九一年六月一日は宮内省御料局長時代であり、同局の地方管理機構である支庁管内巡視の際に西下した記録は見えるものの、尊攘堂滞在期間は不明か、あったとしても業務に伴う短期滞在であり滞在そのものが目的ではないと考えられる。九一年六月一日〜九二年三月一日は内務大臣時代であり、退任後九二年八月までは政局の後始末と国民協会結成に向けた準備の時期、九四年〜九九年は国民協会時代であり、いずれも東京での活動が中心であった。

以上から、品川は基本的に在官時は出張以外で京都を訪れることはなかったことがわかる。国民協会時代も遊説以外ではほとんど東京にいるが、一八九三年、九五年は例外的であった。国民協会解散後は活動の拠点を京都に移している。品川の滞京は、あくまで中央での公務に従属するものであったように見える。

しかし、品川の国民協会指導時には、中央で重要な決議が行われている際にも滞京を優先している事例が確認できる。[87] 品川の滞京は、決して国民協会を含む中央政局が穏やかな時期に限られていたわけではなかった。

それだけではなく、品川は京都以外に在る時も京都関係者との交流や京都情勢の収集を続けていたことがわかる。図3からは、図2上では全く京都と疎遠のように見える時期でも、京都在住者との書簡のやり取りや、京都以外の人物との京都問題に関する書簡のやり取りが一定のボリュームを持っていたことがわかる。

更に、DB2からはこのほかにも、品川が信頼のおける人物に交互に尊攘堂を管理させ、京都在住者との連絡係・京都情勢の収集係としての役目を担わせていた事実も見いだせた。最も日常的に尊攘堂の「留守居役」としての役を任じていたのは、田中治兵衛である。表5からは、田中が品川の京都滞在時の受け入れ先になることもあったことがわかる。田中は品川マトリクスでは第四象限に位置し、複数の指標において網掛けがあり、記号や番号の重なりも大きく、

図1の分析から「品川―尊攘堂ネットワーク」の中核的存在であることがうかがえる人物である。実際、田中は品川留守時の尊攘堂への寄付金を管理していたほか[88]、品川と西本願寺との連絡役となって日常的に両者の間を往復したり、第三章で見たように森寛斎の病気中、森家の金銭面での管理を担い、逐一品川にも報告・相談をしていたり、同じく尊攘堂保存委員であるメンバーとともに品川の留守を守ったり、更には品川を介して前田正名とも頻繁に接触していたことがうかがえる[89]。

また、「品川マトリクス」では第三象限に位置し、複数の指標において着色がある片岡政次は、品川家の書生であり農牧場管理者でもあった。片岡は田中治兵衛の娘婿でもあり[90]、しばしば京都に下り在京関係者、特に西本願寺役僧や有力門徒と品川との連絡に奔走していた[91]。「品川マトリクス」の第三象限と第四象限の交わる辺りに位置する歴史家の川崎三郎（紫山）は、時折尊攘堂に滞在し、留守中の管理に従事していた[92]。更に、第三章で見たように、画家の神坂雪佳も品川の恩顧を受け一時尊攘堂内に寄寓していたとされることから、品川の「京都留守居役」としての任を奉じていたかどうかはともかくとして、書簡から判明する以上に多くの人物が尊攘堂に寄寓していた可能性がある。

しかもこのような「京都留守居役」はそれぞれ別個に活動していたわけではなく、相互に連絡を取り合いながら品川と結びついていた。たとえば片岡は、京都に滞在し品川に京都情勢を報告する際、尊攘堂ではなく義実家でもある文求堂に滞在することもあった[93]。

以上から、品川は京都を離れている時期でも完全に京都の情勢と切り離されていたわけではなく、在野での活動における事務所のごとく尊攘堂を活用し、堂を通じて常に京都情勢に注意を払い続けていたことが読み取れる。これは品川にとって京都が、決して非日常の保養の場でも退避のための場でもなく、日常的に配慮を欠かすことのできない地域であったことを意味する。それは中央政界における公務より優先されるものとまで言うことはできないにせよ、少なくとも中央政界とは異なる重要拠点の一つであったと位置付けることはできるだろう。品川にとって京都尊攘堂は、本来的に維新殉難志士の慰霊・祭典を行うという目的性を持った「施設」であったと同時に、その副次的な性格として、在京阪神地域の有力者や地方人士と接触する「拠点」であったといってよいだろう。

終　章

最後に、本稿で可視化された「品川―尊攘堂ネットワーク」の特徴について要約し、これと品川の地方人士組織との関係について考察する。

第一に、真宗・信用組合・国民協会・五二会等の指標は、これま

での研究の中から品川が組織した、あるいは組織に関わったと思われる団体として筆者が選択的に抽出したものではあったが、これらが中央―東京から遠く離れた京都尊攘堂において発現していたこと、そしてこれらの各領域における人脈が品川―尊攘堂を介して相互に重なり合っていたことである。これらに関する研究がそれぞれ別個の関心から行われ、相互の没交渉を招いていることの問題が指摘できよう。[94]

第二に、真宗関係者であること・信用組合・五二会・国民協会関係者であることは、品川と維新経験を共有しない人びとを、維新殉難者の祭祀・慰霊を目的とする尊攘堂に結びつける要因となっていた。逆に、品川―尊攘堂との関係を通じて、地方人士をこれらの組織に接近させることにもつながっていた。[95]

第三に、品川は尊攘堂管理を任ずる特定の人物を通じて、京都滞在時であると否とにかかわらず上記の人びとと恒常的に連絡を取り合ったり、注視したりしていた。品川にとって京都尊攘堂は、地方人士組織化の京都における拠点、あるいは連絡機関であったといえる。品川にとって京都や尊攘堂は政治から離れた逃避や慰安のためだけの場とは言いがたい。また、維新の昔を懐古し、感傷に浸るためだけの場でもなかった。

このほか、右に述べた中核メンバー以外の人びとに関しては、図1-7が端的に示し、図1-8における下級官員の例が示唆するような「品川―尊攘堂ネットワーク」自体の持つ魅力も誘因ではないかと考えられる。尊攘堂には、まず何より中央政界の実力者である品川を筆頭として、全国各地・各界の有力者、優れた芸術家・気鋭の実業家と結びつくハブとしての意義があったと考えられる。

これらのネットワークの外側には、一度の祭典ごとに数百～数千人にも上る規模の、新聞にも人名が掲載されない参拝者がいたということも忘れてはならないだろう。品川が価値観を共有する人びとをこのように幅広く動員できたという事実、特に維新殉難者の慰霊祭典として早くから行われていた養正社主導の招魂祭に並び立つ規模の一大祭典を一個人として営み、恒例化させていたという事実は、品川においては大きなデモンストレーションになったと考えられるし、このことを通じて品川の社会的地位や名声、存在感が定着することにもなったのではないかと考えられる。

品川が引退する明治三二年まで長らく政界の中で一定の地位を占め続けたことは、まぎれもなく彼の政治力を示す。かつて前田亮介は拙著『皇室財産の政治史』の書評において、拙著が品川の自己規定に引きずられて品川の政治力を過小評価していることを指摘した。[96]指摘は尤もだが、筆者は品川の政治力を決して軽視してはいなかった。ただ、品川が並みいる藩閥指導者たちの中で一定の地位を占め、曲がりなりにも政界に屹立しえた政治力とは、前田の言うような権謀術数を弄する老獪さというよりもまさしくこの組織力・動員力で

はなかったかと考えている。

もちろん、この分析で品川の地方人士組織との関係が明確に導き出せる人びとは全体のうちのごくわずかであり、大半の人びとは「動員」とは言いうるものの「組織」されたかどうかは不明なままである。しかし、「品川―尊攘堂ネットワーク」内の個々の人物が品川のもとに組織されたかどうかということ以上に重要と思われるのは、このような組織との関係が明白／不明な人びとを包み込む大きなネットワークとそれらのハブを品川が持っていたということの意味である。

京都尊攘堂は、様々な背景を持つ人びとがそれぞれの目的や持ち場を一時的に離れて、維新の「勤王」殉難志士を悼むという目的のもと入り乱れる場であった。このような場は、V・ターナーが提唱した「コミュニタス」概念で理解できる。[97]

コミュニタスは、構造の裂け目に出現する未分化・未発達で境界的・外縁的な状況であり、構造とセットになって社会全体を構成する。「反構造」とも呼ばれるが構造を否定するものではなく、構造―コミュニタスは相互補完的な関係にある。政治や法制度、経済社会のように、法制度的・強制的・日常的な領域が構造であり、それに対してそれらの領域から一時的に退避し、それまでの領域における社会的関係や秩序を離れて人びとが自発的・対等に結びつく状態、たとえば儀礼や祭典、巡礼、隠遁生活などがコミュニタスと見なされる。近代日本政治史においてコミュニタス概念を援用した研究は、管見の限りでは坂本一登「伊藤博文と山縣有朋」のみである。[98] 坂本は明示こそしていないものの、伊藤博文の明治一五年から一七年における欧州での立憲制度調査をコミュニタスと位置付けているようである。コミュニタスは、構造の矛盾や行き詰まりから人びとが一時的に（あるいは不本意ながら）退避する場であるが、そこでの境界状態が創造性の源となり、新たな価値を帯びて構造に向かって生まれ変わる契機を生み出す。

そうであるならば、全ての別荘はコミュニタスであると考えられる。しかしとりわけ、品川における尊攘堂は、そこに関わる人々の数や属性から見て大規模かつ独特のコミュニタスであったと言ってよいだろう。「品川―尊攘堂ネットワーク」は、名前の判明する限りでも数百人規模に及び、その背後には更に数百人～数千人の参拝者が存在した。それらの人びとは政治家のみならず、多様な属性・階層にわたっていた。

その中核には、社会問題や利害問題を議会政治や行政機構といった公式ルートのみならず、様々な自助的、あるいは非公式ルートで解決しようとする人びとがいた。「品川―尊攘堂ネットワーク」の中核となっていた京都の商工業者たちは、市会や商業会議所を通じて近代京都の都市行政に大きく入り込んでいた人びととは異質なグループであった。真宗関係者は、政治的には国民協会の重要な支持

層であり、信用組合・五二会は、日本経済の近代化・資本主義的発展の中で、在来産業の維持・発展を共助的になし、その点において中央の有力者と強い親和性を持つグループであった。長州出身者は、中央の有力者を介して官界で生き残ろうとする人たちであった。いずれも政党や地方議会・地方行政ではなく、中央の有力指導者とつながることで、直接国家に把握され、あるいは全国の有力実業家や同業者との横の連携を形成し、自助的発展を目指すことによって、自らの基盤強化・利益実現を図るという共通の行動パターンを持っていた人びとである。そして、彼らは品川が最も組織化に成功した人びとであった。

もちろん、品川自身も公式ルートでの問題解決・利益追求を否定するものではなかった。実際、品川は国民協会を組織して議会政治の中での問題解決を試みてもいた。しかし、彼はその限界にも自覚的であったからこそ、信用組合の組織や五二会、真宗勢力といった各種の議会政治外を活動の場とする団体に関わり、その力を活用しようともしていたのだと考えられる。

尊攘堂では、品川やこうした中核メンバーに止まらない多くの人びとが、維新「勤王」殉難志士を悼むという意味において「同格」である。その「同格」性の中で新たな結合が発生し、あるいは発見され、そして日常の社会構造の中に戻っていくときには、もはや元の関係ではない。

政党を警戒し、露骨な組織化の意図を拒む人びとが多数を占める社会においては、逆説的であるが、「組織」するために「組織しない」場が必要であった。尊攘堂は、その主目的において、品川の地方人士組織とは無関係である。しかし、そこには品川が組織に成功した人びとが集い、相互に連携し、その一部は新たな結合へと発展した。その結合の多くはあくまで、直接的に議会政治において問題解決を図るための組織ではなかった[99]。「組織しない」場が「組織されたくない人びと」に特有の「組織」を生み出す効果をもたらしていた。

品川は、国政においては「良民政党」をそれまでの歴史上最も長期にわたって存続させ、国政外でも信用組合の創設を始め複数の団体に関与し、国家大の課題の民間での自助的解決手段を扶植した点において、藩閥指導者の中では組織巧者であったといえよう。しかしその組織は、品川の個人的力量に全て負っていたと考えるよりは、品川が後の政党のような地方の要望吸収・利益誘導に最適化された仕組みに代わる何らかの武器を持っていたと考える方が自然であろう。その一つが、京都尊攘堂という「コミュニタス」であったというのが本稿の結論である。

そして、本稿で明らかにした事実の前後に、政治史ではよく知られた次の事実を置く時、政治史におけるコミュニタス分析の重要性がより際立つように思われる。すなわち、議会政治開始前に政党結

成のオルタナティブとして機能した「懇親会」という緩やかな結合のあり方[100]や、議会政治において議会外の様々な結合の存在感が増してくる日露戦後〜昭和戦前期の政治状況[101]である。政治において「組織」を生み出すのは、直接的利害だけではなく、一見組織には結びつきそうもない、所属や階層を超えた人びとの交流の場でもある。それを「間接的利益」の供与と見ることはできるだろうが、結局利益に結びつかない場合もあるのでそれほど単純ではない。政党と比べ、非効率で無駄の多いやり方かもしれないが、政党に代わるオルタナティブを必要とする状況の中では時として非常に有効な力を発揮するコミュニタスは、その発現の仕方や活用の度合いなどの実態解明も含めて、政治史の重要な検討対象ではないだろうか。

注

（1）本稿でいう「組織」とは経営学・行政学的な静態的「組織論」におけるそれではなく、動き、生成される「組織」化の過程である。以下、煩雑さを避けるために括弧を外して表記するが、例外的に、品川弥二郎による歴史的・特殊的な組織のあり方を強調する際には括弧付きで表記する。

（2）有泉貞夫『明治政治史の基礎過程——地方政治状況史論』（吉川弘文館、一九八〇年）、伏見岳人『近代日本の予算政治 一九〇〇—一九一四——桂太郎の政治指導と政党内閣の確立過程』（東京大学出版会、二〇一三年）、前田亮介『全国政治の始動——帝国議会開設後の明治国家』（東京大学出版会、二〇一六年）。

（3）伊藤之雄「日本政党政治研究の課題——三谷太一郎氏・テツオ・ナジタ氏の研究をめぐって」（『日本史研究』三四五、一九九一年）、同「桂園体制形成期の政友会の組織改革と原敬」（上横手雅敬監修、井上満郎・杉橋隆夫編『古代・中世の政治と文化』思文閣出版、一九九四年）。

（4）季武嘉也「大選挙区制度下の総選挙と地域政治社会」（『創価大学人文論集』四、一九九二年）、同「戦前期の総選挙と地域社会——近代日本の三つの波動」（『日本歴史』五四四、一九九三年）、村瀬信一「明治期における政党と選挙」（『日本歴史』五四四、一九九三年）、伏見岳人「初期立憲政友会の選挙戦術（一）〜（四）——大選挙区制下の組織統制過程」（『法学』七七-五、七八-二、七九-二、八〇-三、二〇一三年、二〇一四年、二〇一五年、二〇一六年）。

（5）明治期の地方人士の政党認識に関しては、池田真歩「地方社会と明治憲法体制——官僚・政党・町村長」（『アステイオン』九〇、二〇一九年）に的確にまとまっている。

（6）高久嶺之介「「良民党」結成計画について——立憲自由党結成過程の一事実」（『文化史学』三一、一九七五年）、同「明治憲法体制成立期の吏党」（同志社大学人文科学研究所『社会科学』六-三、一九七六年）、同「明治憲法体制と地方民党運動」（『日本史研究』一六三、一九七六年）、伊藤之雄『立憲国家の確立と伊藤博文——内政と外交 一八八九〜一八九八』（吉川弘文館、一九九九年）、小林丈広「京都公民会と都市商工業者」（『キリスト教社会問題研究』五九、二〇一〇年）。

（7）坂野潤治『明治憲法体制の確立——富国強兵と民力休養』東京大学出版会、一九七一年。

（8）「自治党」とは帝国議会開会を見据えて一八八七（明治二〇）年に井上馨が組織を始めた政治団体の総称である。小林は高久の一連の研究を引いて、坂野の「自治党」評価が「自治党」運動の可能性を最大限に拡大した理解であり、「自治党」に結集したとされる各団体の実態を必ずしも正確に捉え

たものではないと言う（前掲小林「京都公民会と都市商工業者」）。伊藤之雄は「自治党」の支持基盤とされた和歌山県について検討し、和歌山で「自治党」を指導した陸奥宗光は「自治党」の最大の支持勢力とされる商工業者との関係性が希薄であったことを指摘した（前掲伊藤『立憲国家の確立と伊藤博文』）。こうした研究により、坂野が従来「自治党」の支持基盤と見なしてきた地域においても実態としては都市商工業者の政治的な動きと「自治党」運動との有機的な関連性は見出せないことがわかってきた。

（9）奥谷松治『品川弥二郎伝』（高陽書院、一九四〇年）三一一～三一二頁。組織化とは政党だけに限った問題ではない。信用組合や前田正名の五二会のような産業組織化や宗教を通じた民衆組織化・動員も、国家が様々な政策を遂行していく上では無視することのできない重要性を持っている。内務省や農商務省がこれらを監督下に置いていた（あるいは置きたがった）ことはそのことを何より雄弁に物語っている。

（10）佐々木隆「明治時代の政治的コミュニケーション（その3）」『東京大学新聞研究所紀要』三五、一九八六年。

（11）佐藤信『近代日本の統治と空間――私邸・別荘・庁舎』東京大学出版会、二〇二〇年。

（12）同右、四三八頁。

（13）佐藤は「京阪別荘」と総括しているが、分析対象とされている政治家の別荘は大阪にはなく京都・神戸に集中していることから、「京神別荘」と呼ぶにふさわしいものであるが、ここでは佐藤の表現をそのまま用いる。

（14）前掲佐藤『近代日本の統治と空間』二〇七頁。

（15）同右、一九八頁。

（16）そのような「地方」の姿を活写したのが御厨貴『明治国家形成と地方経営――1881～1890年』（東京大学出版会、一九八〇年）ではなかったか。国家統治の必要からの地方統治の重要性は、士族授産政策の研究においても強調されてきた観点である（落合弘樹『明治国家と士族』〈吉川弘文館、二〇〇一年〉Ⅲ）。

（17）このような指摘を意識してか、佐藤は政治家の京阪（神）別荘を「確かに全く非政治の場であった訳ではない」として、琵琶湖疎水成立との関係や京都府知事の訪問、東山鉄道計画との関係や政治家との会合の存在を挙げるが、それらはいずれも「僅か」であり、「国家統治に関わる政策決定」はほとんどなされないという評価は変わらない（二〇八～二〇九頁）。建築史家の矢ヶ崎善太郎は山縣有朋の第三次無鄰菴について「山縣の別邸は単に山縣自身の保養の場であるばかりでなく、政界や実業界の有力者との交流の場であり、いわば中央から離れた政治の場でもあった」とその政治性を認めている（矢ヶ崎善太郎『近代京都の東山地域における別邸・邸宅群の形成と数寄空間に関する研究』〈京都工芸繊維大学博士論文、一九九八年〉一七頁）。しかし、「山縣有朋の別邸が単なる山縣の保養の場であるだけでなく、京都における政治の場としての性格をも有し、有力者たちに別邸造営の場として京都東山地域の存在を注目させる効果が期待されていた」（同右）との言に見えるように、京都別邸が「中央政界の実力者・山縣有朋」にとってどのような意味を持っていたかという観点が弱いために中央政界中心の政治史の関心から外れたのかもしれない。

（18）佐藤ももちろんこの点を考慮してか、政党政治家の空間利用の考察の中で、「議会政治が定着すると、政党政治家は選挙区に拠点を置く必要にも迫られた」と述べることを忘れない。しかし、そのすぐ直後に「それでも政党政治家にとって東京という統治の中心にいることは耐えがたく魅力的であった」（三六四頁）とし、あくまで政党政治家の拠点は中央＝東京であったことを強調する。

（19）奈良岡聰智「大磯から見た近代日本政治」（『創文』五〇二、二〇〇七年）、同「「別荘」から見た近代日本政治」（『月刊自由民主』六六五、二〇〇八年）、同「伊藤博文と大磯」（大磯町郷土資料館編刊『伊藤博文没後100年記念展――滄浪閣の時代』二〇〇九年）、同「別荘」からみた近代日本政治

第1回〜第16回」（『公研』四八-四〜十二、二〇一〇年、四九-一〜七、二〇一一年）、同「近代日本政治と「別荘」――「政界の奥座敷」大磯を中心として」（筒井清忠編著『政治的リーダーと文化』千倉書房、二〇一一年）、同「原敬をめぐる「政治空間」――芝本邸・盛岡別邸・腰越別荘」（伊藤之雄編著『原敬と政党政治の確立』千倉書房、二〇一四年）、奈良岡聰智「西園寺公望の別荘から京都大学の清風荘へ――伝統と学知の継承」（松田文彦・今西純一・中嶋節子・奈良岡聰智編著『清風荘と近代の学知』京都大学学術出版会、二〇二一年）。

(20) 前掲奈良岡「原敬をめぐる「政治空間」」六一九頁。

(21) 前掲奈良岡「「別荘」から見た近代日本政治　第1回」六七〜七一頁。

(22) 前掲奈良岡「「別荘」から見た近代日本政治　第2回」六五頁。

(23) もちろん、奈良岡は伊藤博文の別荘所在地・大磯との関係を論じる中で、伊藤が大磯小学校新築のために多額の寄付をしたことや、毎年大磯小学校の新入生に十銭入りの郵便貯金通帳をプレゼントしたことなど、地元・大磯の発展に尽くしたエピソードは挙げている。「地元の発展に尽くす」という観点においては、本稿で想定している品川弥二郎の京都との関わりと共通するものがある。しかし、詳しくは本論で検討することになるが、品川の別荘所在地との関わり方は伊藤のそれともまた異質なのではないかと考えている。それは、伊藤の別荘との関わり方が「居住地への感謝」という一方的かつ恩恵的なものであったと思われるのに対し、品川のそれは、彼の全国的組織化という政治課題の中で位置付けられる点、京都・那須などまさにその地域に置かれることに、「風光」「好環境」といった、およそ別荘一般にイメージされる価値以上の政治的な重要性があり、上下関係というよりもむしろ地域と品川の共利共生関係にあった点においてである。なお、西園寺公望が大正二（一九一三）年以来京都別荘として利用してきた清風荘に関する奈良岡の近著では、清風荘を訪れた政治家・文人・学者・学生などの多様な人脈を精彩に示し、別荘研究の中でも注目すべき成果である（前掲奈良岡「西園寺公望の別荘から京都大学の清風荘へ」）。しかし、叙述的アプローチの限界でもあろうが、ある程度以上の人数を網羅することができず、本文で示したような課題は依然として残る。

(24) 並木誠士・青木美保子『京都　近代美術工芸のネットワーク』（思文閣出版、二〇一七年）。これに先立つ研究として、並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編『京都　伝統工芸の近代』（思文閣出版、二〇一二年）も重要である。また、高木博志「富岡鉄斎が顕彰する国史――名教の精神を芸術に寓す」（『史林』一〇一-一、二〇一八年）も富岡鉄斎という人物を中心とした人的ネットワークを解明した研究として挙げておきたい。

(25) 鈴木恒夫・小早川洋一・和田一夫『企業家ネットワークの形成と展開――データベースからみた近代日本の地域経済』（名古屋大学出版会、二〇〇九年）。京阪神に関しては上川芳実の詳細な検討がある。上川芳実「明治31年における京都府の企業家集団」（『京都学園大学経営学部論集』三-三、一九九四年）、同「明治40年京都府の企業家集団」（『同』四-一、一九九四年）、同「明治31年大阪府の企業家集団」（『同』七-二、一九九七年）、同「明治40年大阪府の企業家集団」（『同』八-二、一九九八年）、同「明治期京都市の企業家層」（『同志社商学』五〇-五・六、一九九九年）、同「明治31年兵庫県の企業家集団」（『京都学園大学経営学部論集』九-二、一九九九年）、同「明治40年兵庫県の企業家集団」（『同』十-三、二〇〇一年）、同「明治期大阪市の企業家層」（『大阪大学経済学』五四-三、二〇〇四年）。

(26) 経営史において「ネットワーク」というとき、単なる「人間関係の網の目」という一般的用法ではなく独特の意味において捉えられている。それは、総合財閥、「地方財閥」に並んで、明治期の日本経済発展を担った一つの特徴的な企業家類型として考えらえてきた「企業家グループ」、すなわち何人もの企業家が共同出資し、複数の会社を所有し、支配していたグループとしてである。

(27) 齋藤康彦『近代数寄者のネットワーク――茶の湯を愛した実業家たち』思文閣出版、二〇一二年。

(28) 「尊攘堂」と名のつく施設は長門にもあった。品川の死後、その遺志を引き継いだ桂弥一が郷里に尊攘堂創設を発起、一九三二（昭和七）年の品川忌に起工し、翌年一〇月二〇日に竣工・開館した（下関市立長府博物館編刊『桂弥一と長門尊攘堂』二〇〇〇年、三～四頁。品川は生前より長門にも尊攘堂を設ける意向を桂に度々語っていた）。以下、品川弥二郎が京都に設けた尊攘堂について論じることを明確にする際には特に「京都尊攘堂」とし、単に「尊攘堂」としている時は全て京都尊攘堂を指すこととする。

(29) 本章における京都尊攘堂に関する説明は、特に断らない限り村田峯次郎『品川子爵伝』（大日本図書、一九一〇年）五五三～五六六頁、田中常太郎編『尊攘堂誌』（寸紅堂、一九二八年）、同『尊攘堂誌 補遺』（同、一九三一年）、今井貞次郎編『尊攘堂之由来及年譜』（八方堂、一九三七年）、京都帝国大学附属図書館編刊『尊攘堂誌』（一九四〇年）、及びこれらをもとに叙述した拙稿「京都・尊攘堂における「活きた勤王」――近代京都文化を作り、支えた人びと」（高木博志編『近代京都と文化』思文閣出版、二〇二三年刊行予定）第一節による。

(30) 尊攘堂の敷地がもと源頼政の邸宅地内にあったことから堂内には頼政の木像と位牌、菖蒲前念誦物観音木像が置かれていた（「尊攘堂保存ノ旨趣」〈「品川文書1　書類」R80-1628〉）、「京都高倉錦小路上ル貝屋町地所関係書類」〈同右、R80-1634〉）。

(31) 各祭典の開催年月日・参拝者数は『品川文書』一～八のほか、『大阪日報』、『読売新聞』、『日出新聞』を参照した。

(32) 養正社は、一八七六（明治九年）に京都府知事槇村正直・木戸孝允ら長州出身の政治家により設立された、維新殉難志士のための招魂祭を行う団体である（白川哲夫「招魂社の役割と構造――「戦没者慰霊」の再検討」〈『日本史研究』五〇三、二〇〇四年〉九～一六頁）。

(33) 白川哲夫はこれを養正社主体の祭典と位置付けているが、催主が品川弥二郎であったこと、松本鼎ら後に尊攘堂保存委員となる面々が運営にあたっていること、祭典の名目も「元治甲子殉難者」の追悼であったこと、品川が同年八月九日に松本らとともに祭典準備等について話し合っていたこと（明治二六年九月九日『読売新聞』、明治二六年九月六日『日出新聞』、「明治廿六年懐中日記」〈「品川文書1　書類」R76-1584〉）から、尊攘堂祭典が母体となって招魂祭とコラボしたものと考えるべきであろう。養正社の招魂祭の方では一〇月一四日～一五日に恒例の官祭のみ別途行われている（前掲白川哲夫「招魂社の役割と構造」一四頁）ことに鑑みても、九月五日の祭典が恒例の招魂祭とは異なる位置づけであったことがうかがえる。

(34) 明治（二九）年八月三日付品川弥二郎宛矢尾板正書簡に「先般は尊攘堂の委細を記せし摺本御恩与に預り万々難有奉拝謝候。御創立の尊意を了知仕り拙文多少相改め申候」（『品川文書』七、二七七頁）とあるように、「尊攘堂保存ノ旨趣」は各地の有志へ送付されていたことがわかる。明治二八年一二月付品川弥二郎宛菊池福太郎（東京生まれ。品川の勧めにより小笠原母島で砂糖栽培に着手していた）書簡には、「尊攘堂御発起之御旨趣書御恵投之栄を賜り謹て拝読仕候。野老之如き朝敵余類之残躯にても御加入之栄を賜るものに候や」とある（『品川文書』三、二六二～二六三頁）ことに鑑みると、明治二八年から類似の文書が発送されていたものと思われる。

(35) 前掲『尊攘堂誌 補遺』六頁、および高橋真一『京都金融史』（京華日報社、一九二五年）四〇頁では譲渡とされているが、前掲「京都高倉錦小路上ル貝屋町地所関係書類」によれば「売却」であり、田中源太郎は銀行集会所の代表として契約していたことがわかる。

(36) 京都帝国大学移管後の尊攘堂での祭典・展観については前掲拙稿「京都・尊攘堂における「活きた勤王」」に詳述した。

(37) 前掲『尊攘堂誌』（一九二八年）八頁。

(38) ＤＢ２を作成するにあたって参照した史料は以下の通りである。『品川文書』一～八、「品川文書１　書簡」「品川文書２　書簡」、国立国会図書館憲政資料室所蔵「安達謙蔵関係文書」・「井上馨関係文書」・「榎本武揚関係文書」・「大岡育造関係文書」・「樺山資紀関係文書」・「佐々友房関係文書」・「杉孫七郎関係文書」・「寺内正毅関係文書」・「野村靖関係文書」・「平田東助関係文書」・「前田正名関係文書」・「薬袋義一関係文書」・「陸奥宗光関係文書」・「吉井友実関係文書」・「渡辺国武関係文書」・「憲政資料室収集文書」中品川弥二郎書簡、東京都立中央図書館所蔵「渡辺刀水旧蔵諸家書簡文庫」、東京都立大学所蔵「高橋是清関係文書」、釜石市立鉄の歴史館所蔵「大島家文書」、神奈川県立公文書館所蔵「山口コレクション」、京都大学附属図書館所蔵「維新特別資料文庫」、京都・広誠院所蔵史料、京都府立京都学・歴彩館所蔵「革島家文書」、前掲村田峯次郎『品川子爵伝』、前掲奥谷松治『品川弥二郎伝』、金原治山治水財団編刊・土屋喬雄監修『金原明善　資料　下』（一九六八年）、伊藤隆・坂野潤治編「岩村通俊関係文書（二）」（『史学雑誌』七八-一二、一九六九年）、井上毅伝記編纂委員会編『井上毅傳　史料篇　第五』（國學院大學図書館、一九七五年）、伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』第五巻（塙書房、一九七七年）、沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』（山川出版社、一九八五年）、大久保達正監修・松方峰雄ほか編『松方正義関係文書』第八巻（巌南堂書店、一九八七年）、沼田哲「「元田永孚関係文書補遺」並びに「元田永孚文書目録」」（『青山史学』一〇、一九八八年）、日本大学大学史編纂室編『山田伯爵家文書　巻五・六・七・八』（日本大学、一九九一年）、同右『同右　巻九・一〇・一一・一二』（同右、一九九一年）、尚友倶楽部・長井純市編『渡辺千秋関係文書』（山川出版社、一九九四年）、堀口修・西川誠監修・編『公刊明治天皇御期編修委員会史料　末松子爵家所蔵文書』上・下巻（ゆまに書房、二〇〇三年）、佛教大学近代書簡研究会編『宮津市立前尾記念文庫所蔵　元勲・近代諸家書簡集成』（思文閣出版、二〇〇四年）、尚友倶楽部山縣有朋関係文書編纂委員会編『山縣有朋関係文書』第二巻（山川出版社、二〇〇六年）、千葉功『桂太郎関係文書』（東京大学出版会、二〇一〇年）、尚友倶楽部史料調査室・松田好史編『尚友ブックレット29　周布公平関係文書』（尚友倶楽部、二〇一五年）、池田さなえ「川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛関係文書」品川弥二郎書翰」（『史林』一〇三-五、二〇二〇年）、京都大学文学部日本史研究室編『田中不二麿関係文書』（思文閣出版、二〇二一年）、『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』、『大阪日報』、『大阪毎日新聞』、『読売新聞』、『日出新聞』および前掲『尊攘堂之由来及年譜』。このほか、以下の諸機関にご協力をいただいた（順不同）。山口県文書館、摂津市、住友史料館、佐川町立青山文庫、高島屋史料館、千總文化研究所、並河靖之七宝記念館、下関市立歴史博物館、山縣有朋記念館。但し、「品川文書１　書簡」に関しては、『品川文書』一～八所収のもの以外については今回は確認できなかった。今後の課題としたい。

(39) 山田太造・野村朋弘・井上聡「トピックモデルを用いた天正期古記録『上井覚兼日記』における人物間関係の検出」（『じんもんこん２０１４論文集』二〇一四年）、山田太造・遠藤珠紀・荒木裕行・井上聡・久留島典子「前近代日本史史料から人名を集める」（『じんもんこん２０１６論文集』二〇一六年）、山田太造・畑山周平・小瀬玄士・遠藤珠紀・井上聡・久留島典子「前近代日本史史料における人物関係とその時空間変化――天正期古記録『上井覚兼日記』を例に」（『じんもんこん２０１７論文集』二〇一七年）など。

(40) 前掲拙稿「京都・尊攘堂における「活きた勤王」」。

(41) 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ（https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013759）。一八九〇年品川の勧めで図案家の岸光景に入門し、工芸意匠を学びながら琳派の研究をしたことも知られている（前掲並木誠士ほか編『京都　近代美術工芸のネットワーク』四〇頁、山田由希代執筆部分）。

(42) 田中治兵衛は、禁裏御用・長州藩御用・薩摩藩御用などを預かる書肆であり、幕末に品川が京都に潜伏していた当時、長州藩邸に出入りし、品川

の書面を各方面に遣わし連絡を助けたり、品川に店舗の二階を貸し密議を助けたりした（前掲『品川弥二郎伝』七七頁）。また品川作「都風流トンヤレ節」の版元として長州藩の宣伝活動に協力していたことでも有名である（西沢爽『日本近代歌謡史 上』〈桜楓社、一九九〇年〉第三章、京都出版史編纂委員会編『京都出版史――明治元年―昭和二十年』〈社団法人日本書籍出版協会京都支部、一九九一年〉六二五頁）。

(43) 品川弥二郎宛の森寛斎の一連の書簡（『品川文書』七、二五六～二六二頁）、および明治（二七）年一月二二日品川弥二郎宛田中治兵衛書簡（『品川文書』五、九二～九三頁）。森寛斎と品川との親交については、近年は奈良国立博物館編『特別展 名画の殿堂 藤田美術館展――傳三郎のまなざし』（奈良国立博物館・朝日新聞社・ＮＨＫ奈良放送局・ＮＨＫエンタープライズ近畿、二〇二一年）一六二～一六三頁（中野慎之執筆）でも指摘されている。

(44) 富岡鉄斎の勤王家としての経歴は、小高根太郎『富岡鉄斎』（吉川弘文館、一九六〇年）を参照した。

(45) 御料地運営方針をめぐっての品川と田中の対立は、池田さなえ『皇室財産の政治史――明治二〇年代の御料地「処分」と宮中・府中』（人文書院、二〇一九年）第三章。

(46) 田中光顕『維新風雲回顧録』（河出書房新社、二〇一〇年。原著は大日本雄弁会講談社より一九二八年刊、その後大和書房より一九六八年、河出書房から一九九〇年再刊）からそのことはうかがえる。慶応三（一八六七）年の夏に品川と田中、鳥尾小弥太らが特に目的もなく比叡山に登山に行き、一晩連絡がなかったために幕吏に捕らえられたものかと山縣が気を揉んだというエピソード（同右、三〇四～三〇八頁）は、暗殺と闘争の渦巻く幕末にあってほんのひとときの青春を過ごした思い出として彼らの記憶に長く残り続けたものと思われ、品川も山縣に後年この思い出を語っている（明治二九年八月一六日付山縣有朋宛品川弥二郎書簡〈前掲『山縣有朋関係文書』二、二〇八～二〇九頁〉）。品川と田中の維新顕彰活動を通じた交流については、前掲拙稿「京都・尊攘堂における「活きた勤王」」でもやや詳しく指摘している

(47) 成田山書道美術館監修『近代文人のいとなみ』淡交社、二〇〇六年。

(48) 羽賀祥二「尾張藩の「幕末文化」と地誌編纂」羽賀祥二編『近代日本の地域と文化』吉川弘文館、二〇一八年。

(49) 小林丈広『明治維新と京都――公家社会の解体』（臨川書店、二〇〇四年）三六～四五頁。

(50) このような人びとは物品寄付だけではなく金員の寄付を行うこともあった。表1に見える篆刻家の川井仙郎などはその例であるといってよいだろう。

(51) 明治三二年二月七日付野村靖宛品川弥二郎書簡（前掲「野村靖関係文書」R1-4-18）より推察。

(52) 豊田小八郎『田中河内之介伝』（繁本良之助、一九〇〇年）「緒言」。

(53) 一八九七（明治三〇）年二月七日の松尾珍臣以下南信東濃からの一行からの寄付については、同日品川は不在であったため、寄付金は品川本邸まで届けられた。後に品川がこれを田中治兵衛に送金している（明治三〇年三月三日付田中治兵衛宛品川弥二郎書簡〈「品川文書2　書簡」51-10〉）。

(54) 京都では博物学者山本亡羊の読書室を中心とした本草会ネットワークが形成されていた。章夫はその子、復一はその孫である（前掲小林丈広『明治維新と京都』一〇七～一〇八頁）。

(55) 明治期の政治史研究において品川は必ずといってよいほど登場するアクターであるが、品川の政治的位置に関する言及があるものとして、特に佐々木隆『藩閥政府と立憲政治』（吉川弘文館、一九九二年）、同「内務省時代の白根専一――「山県系」形成の起点」（伊藤隆編『山県有朋と近代日本』吉川弘文館、二〇〇八年）、末木孝典『選挙干渉と立憲政治』（慶應義塾大学出版会、二〇一八年）、前掲前田亮介『全国政治の始動』、伊藤陽平

『日清・日露戦後経営と議会政治――官民調和構想の相克』（吉川弘文館、二〇二一年）を挙げておきたい。

(56) 串山まゆら「初期議会期における品川弥二郎と本願寺派役僧」（『日本宗教文化史研究』七―一、二〇〇三年）、深見泰孝「仏教系生命保険会社の生成について――真宗信徒生命を中心に」（『保険学雑誌』六〇二、二〇〇八年）、池田さなえ「仏教教団の「近代化」における門信徒の経済的役割――明治期・西本願寺「有力門徒」らによる会社設立」（『史学雑誌』一三〇―一〇、二〇二一年）。

(57) 住友家との関係について瀬岡誠「伊庭貞剛の社会的基盤――品川弥二郎を中心にして」（『大阪学院大学国際学論集』一三―二、二〇〇二年）、農商務省時代の品川に関して祖田修『前田正名』（吉川弘文館、一九九五年）、勝部眞人『明治農政と技術革新』（吉川弘文館、二〇〇二年）、信用組合に関して川野重任「産業組合制度の日本への移植――明治日本における制度移入の問題」（『東海大学政治経済学部紀要』一一、一九八〇年）、渋谷隆一「わが国における信用組合思想の導入とその立法過程――明治二四年の信用組合法案を中心に」（『社会経済史学』三八―四、一九七二年）、中原准一「信用組合法案の社会的性格――形成期日本資本主義との関連で」（『北海道大学農経論叢』三〇、一九七四年）、その前提としての報徳社との関係について前田寿紀「「二宮尊徳翁五十年記念会」以前における報徳社とその周辺」（『金沢大学大学教育開放センター紀要』一二、一九九二年）、見城悌治『近代報徳思想と日本社会』（ぺりかん社、二〇〇九年）、農商務省時代の中でも特に共同運輸問題に関しては日本郵船株式会社編『日本郵船株式会社五十年史』（日本郵船、一九三五年）一八～五七頁、井上洋一郎「共同運輸会社の経営」（『彦根論叢』二三四・二三五、一九八五年）、加地照義「共同運輸会社の設立――反三菱汽船勢力の結集」（『海運経済研究』八、一九七四年）、佐々木誠治『日本海運競争史序説』（海事研究会、一九五四年）、梅村又次「松方デフレ下の勧業政策」（梅村又次・中村隆英編『松方財政と殖産興業政策』東京大学出版会、一九八三年）、八木慶和「「明治一四年政変」と日本銀行――共同運輸会社貸出をめぐって」（『社会経済史学』五三―五、一九八七年）、日本経営史研究所編『日本郵船株式会社百年史』（日本郵船、一九八八年）二一～三一頁、小風秀雅『帝国主義下の日本海運――国際競争と対外自立』（山川出版社、一九九五年）第四章、大石直樹「三菱と共同運輸会社の競争過程――日本郵船会社の設立をめぐって」（『三菱史料館論集』九、二〇〇八年）、関口かをり・武田晴人「郵便汽船三菱会社と共同運輸会社の「競争」実態について」（『三菱史料館論集』一一、二〇一〇年）、地方名望家との関わりに関して池田さなえ「明治国家のなかの古橋父子」（新修豊田市史編さん専門委員会編『新修豊田市史４ 通史編 近代』豊田市、二〇二二年）、皇室財産運営における経済産業政策の影響に関して前掲拙稿『皇室財産の政治史』などがある。

(58) 樋口輝久・馬場俊介・天野武弘・片岡靖志「中国地方の人造石工法――服部長七をめぐる人間関係」（『土木史研究 論文集』二六、二〇〇七年）。

(59) 前掲拙稿「川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛関係文書」品川弥二郎書翰」。

(60) 池田さなえ「皇室財産と立憲政治――初期議会期を中心として」（史学会第一一七回大会 近現代史シンポジウム、於東京大学本郷キャンパス、二〇一九年一一月一〇日）、および前掲拙稿「川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛関係文書」品川弥二郎書翰」。

(61) このほか、品川の活動に関しては教育業界におけるものも重要であるが、今回はこの点に関する分析は行っていない。別稿において言及している（池田さなえ「政治史研究と年史編纂」小林和幸編『東京10大学の１５０年史』筑摩書房、二〇二三年）が、後日本稿と同様の方法で分析を行う必要を感じている。

(62) 神官は内務省所管であるが、品川が内務大臣であった時期以外に直接のやり取りはほとんど確認できないので、他の条件との衡量の結果この位置

に置いた。

(63) 「五二会」とは、前田正名と京都の在来産業家らを中心に一八九四（明治二七）年に結成された、在来産業・美術工芸品の高品質化・生産強化・輸出拡大等を目指す団体およびそれらの開催する大規模品評会の名称である。

(64) 前掲拙稿「川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛関係文書」品川弥二郎書翰」。

(65) 「居士」（在家仏教者）としての品川については、友松円諦「在家仏教徒の活動」（法藏館編集部編『講座 近代仏教 第Ⅱ巻』法藏館、一九六一年）、吉田久一『日本近代仏教社会史研究』（吉川弘文館、一九六四年）一八一～一八九頁、柏原祐泉『日本仏教史 近代』（吉川弘文館、二〇〇一年。初版は一九九〇年）九五～一一七頁などにおいて指摘されてきた。

(66) 前掲串山「初期議会期における品川弥二郎と本願寺派役僧」。

(67) 川島甚兵衛は判明する限り親の代からの本願寺派門徒であった（前掲拙稿「川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛関係文書」品川弥二郎書翰」一〇八～一〇九頁）。

(68) 前掲拙稿「仏教教団の「近代化」における門信徒の経済的役割」。

(69) 近世名将言行録刊行会編『近世名将言行録 第2巻』（吉川弘文館、一九三四年）三六四～三七三頁。

(70) 中西牛郎に関しては、大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編『近代仏教スタディーズ――仏教からみたもうひとつの近代』（法藏館、二〇一六年）、赤松徹眞編著『龍谷大学仏教文化研究叢書35 シリーズ近代日本の仏教ジャーナリズム第1巻『反省会雑誌』とその周辺』（法藏館、二〇一八年）に詳しい。

(71) 辻本仁兵衛編『帝国議会衆議院議員名鑑』（文栄社、一八九〇年）一七頁、木戸照陽編『日本帝国国会議員正伝』（田中宋栄堂、一八九〇年）五六〇～五六一頁、衆議院・参議院編『議会制度七十年史 第11』（大蔵省印刷局、一九六二年）六〇頁。三河という地域性を考えれば大谷派の可能性が濃厚であるが、詳細は不明である。

(72) 取引コストとは経済学上の用語だが、ここでは政治的に人脈を形成する際に相手の信頼性を図る費用や労力という意味で用いている。

(73) 但し、住友家関係者・光村弥兵衛に関しては禅宗に帰依していたことが知られている（鈴木馬左也は住友本店重役を歴任した人物で、禅宗に帰依していたが真宗の信仰もあった）。品川は禅の実践にも関心を持ち、住友家関係者や光村とは禅を通じて親交を深めていた（中西牛郎『従六位光村弥兵衛伝』〈中西牛郎、一八九四年〉四三～四四頁、武井昭「鈴木馬左也と越後正一の仏教と経営観」（駒澤大学仏教経済研究所『仏教経済研究』二三、一九九四年）、前掲瀬岡誠「伊庭貞剛の社会的基盤」、辻井清吉「経営者の宗教的・社会的義務感――鈴木馬左也と越後正一を事例にして」〈『仏教経済研究』四一、二〇一二年〉）。

(74) 京都に関して見た限りでは、記録されている一九〇〇年以前の設立にかかる信用組合は、その類似団体を含めても十一団体に過ぎず、いずれも郡部のものである（産業組合中央会京都支会編『京都府産業組合史』〈京都府産業組合史編纂部、一九四四年〉六～九頁）。「品川―尊攘堂ネットワーク」に見える京都在住者はほとんどが市内の商工業者である。

(75) 明治（三〇）年五月一四日付品川弥二郎宛高井幸三書簡（『品川文書』五、五～六頁）。

(76) 明治（二九）年九月一九日付品川弥二郎宛川島甚兵衛書簡（『品川文書』三、二二六～二二八頁）、明治（三二）年一二月一二日付品川弥二郎宛中村喜之助書簡（『品川文書』五、二七五～二七六頁）、明治（三二）年一二月二七日付品川弥二郎宛平田東助書簡（『品川文書』六、一一九頁）、明治三三年一月二二日付品川弥二郎宛中村喜之助書簡（『品川文書』五、二七六頁）。

(77) 前田正名は品川が農商務大輔であった時代（一八八一～一八八五）の下僚であり、省内でも最も品川に近いグループ（「品川グループ」「殖産興業

グループ」）のリーダー格であった（上山和雄「前田正名と農商務省」〈『日本歴史』三四三、一九七六年〉、前掲有泉貞夫『明治政治史の基礎過程』第二章補論、前掲御厨貴『明治国家形成と地方経営』、前掲梅村又次「松方デフレ下の勧業政策」、前掲祖田修『前田正名』）。同省退職後も朝野にあって品川と様々な形で密接な関係を維持していたことはかつて筆者が何度か指摘したところである。前掲拙著『皇室財産の政治史』一〇九～一一〇頁では、品川が全国行脚等による借金に苦しむ前田を救うべく、前田と武井守正（同じく農商務省「品川グループ」官僚であった）の所有する山林を御料局に買い上げてもらうべくひそかに動いていたことを指摘した。このほか、前掲拙稿「川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛関係文書」品川弥二郎書翰」では、前田が田中治兵衛とも品川を介して親しく付き合っていたこと、品川が神戸の資産家・光村弥兵衛に前田を紹介し、品川が売却した熊内（くまうち）の別荘の管理を任せていたことなどを指摘した。ちなみに、DB2からは品川の兵庫での定宿は光村邸であったこともわかる。もともと光村邸は一八八五（明治一八）年に品川が神戸の熊内に購入した「雲路山荘」であり、後に光村弥兵衛に売却し、家屋を光村の須磨別邸に移築したものであった（前掲『品川子爵伝』五四一、五六六～五六七頁、前掲『品川弥二郎伝』二二一頁、「神戸宅絵図」〈「品川文書2　書類」170〉）。

（78）前掲祖田修『前田正名』一四八～一五〇頁、前掲御厨貴『明治国家形成と地方経営』二四八頁。

（79）一八九一（明治二四）年四月頃、大洲・小田と赤松連城の「防長グループ」役僧らは品川の持つ北海道農牧場を譲り受け、品川家の北海道農牧場の苦しい経営を一時的に肩代わりしたことは、先に拙稿「仏教教団の「近代化」における門信徒の経済的役割」で指摘したところであり、その具体相については「牧場処有関係疑問点、及総面積」、「面積調」（「品川文書1　書類」R85-1744、1745）により明らかになる。

（80）前掲拙稿「川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛関係文書」品川弥二郎書翰」。

（81）前掲拙稿「京都・尊攘堂における「活きた勤王」」。

（82）前掲拙稿「仏教教団の「近代化」における門信徒の経済的役割」。

（83）「千岱野牧場関係書類」（「品川文書1　書類」R84-1736-1）所収の「片岡氏貸金調　明治廿年十二月」（三井物産会社函館支店作成）、及び明治二一年一二月三〇日付三井物産会社松岡護宛品川弥二郎代片岡政次「借用証」、「御立替金利子勘定書」（明治二一年五月、三井物産が品川に宛てて送ったもの）。

（84）一例を挙げれば明治（二八）年八月三一日付野村靖宛品川弥二郎書簡（前掲「野村靖関係文書」R4-10-1-11）、明治（三一）年四月七日付伊藤博文宛品川弥二郎書簡（前掲『伊藤博文関係文書』五、二五七頁）、明治（三二）年四月一四日付山縣有朋宛品川弥二郎書簡（前掲『山縣有朋関係文書』二、二一八～二一九頁）など。

（85）下級武士が秩禄処分後に軍人になる例が多かったことは、落合弘樹『秩禄処分――明治維新と武家の解体』（講談社、二〇一五年）。

（86）このほかの考え得る尊攘堂保存委員のバックグラウンドについては前掲拙稿「京都・尊攘堂における「活きた勤王」」に詳述した。

（87）品川の一八九三年九月の滞京中、六日に国民協会の在東京代議士が臨時集会を開き、重要事項の決定に際し品川の臨席を請うこととなり、今井磯一郎がその日の終列車で京都の品川のもとに向かっている（明治二六年九月七日『日出新聞』）。この時期の中央政界では、国民協会と改進党が接近を模索するという大きな再編のうねりが生じており（前掲佐々木隆『藩閥政府と立憲政治』三四三～三四四頁）、決して落ち着いている状況ではなかった。

（88）前掲明治三〇年三月三日付品川弥二郎宛田中治兵衛書簡。

（89）前掲明治（二七）年一月二二日付品川弥二郎宛田中治兵衛書簡、明治

（二四）年（七）月（四）日付品川弥二郎宛大洲鉄然書簡（『品川文書』二、二五一～二五二頁）、明治（二六）年七月一三日付品川弥二郎宛赤松連城書簡（『品川文書』一、一八七頁）。品川―田中の関係は尊攘堂創設前からのものであり、川島甚兵衛や光村弥兵衛、前田正名もその関係に組み込まれていた（明治（二〇）年四月一九日付川島甚兵衛宛品川弥二郎書簡、明治（一九）年七月一八日付田中治兵衛宛品川弥二郎書簡写、明治（一九）年一二月一〇日付田中治兵衛宛光村弥兵衛書簡〔写カ〕、明治（一九）年一〇月一八日付光村弥兵衛宛品川弥二郎書簡写〈前掲拙稿「川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛関係文書」品川弥二郎書翰」一一一～一一二、一一六～一一九頁〉）。

（90）片岡が田中の婿であり品川家の書生であったことについては、明治（三〇）年一〇月一四日付近藤幸止宛品川弥二郎書簡（「品川文書2　書簡」246-1乾②）。

（91）明治（二四）年八月二四日付品川弥二郎宛片岡政次書簡（『品川文書』三、四七頁）、明治（二七）年八月三日付品川宛片岡書簡（『品川文書』三、四八～四九頁）、明治（二四）年四月一一日付品川宛片岡書簡（『品川文書』八、四九五頁）、明治（二五）年三月一一日付品川宛片岡書簡（『品川文書』八、四九五～四九七頁）、明治（二四）年四月一八日付品川宛赤松連城・小田仏乗・大洲鉄然書簡（『品川文書』八、四七四頁）、前掲明治（二四）年（七）月（四）日付品川宛大洲書簡、明治（二八）年一月三一日付品川弥二郎宛赤松連城書簡（『品川文書』一、一八八頁）。このような片岡の様子については、高井幸三が次のように品川に報じるところからも間接的にうかがえる。「過日御西下之思召有之趣仄に承り候に付、希望之意を上申仕置候処、此際中々其場合に至らさる旨片岡より拝承仕候。……委細片岡明日発途帰京仕候条、御聞取可被下候」（明治〈三一〉年一〇月二七日付品川弥二郎宛高井幸三書簡〈『品川文書』五、七頁〉）。片岡の西本願寺への関与については前掲拙稿「仏教教団の「近代化」における門信徒の経済的役割」にて詳述している。

（92）明治（二八）年七月三日付品川宛川崎三郎書簡（『品川文書』三、二〇七頁）。ちなみに、この日付は品川が尊攘堂に滞在している日（図2参照）に当たるので、川崎が「尊攘堂」から東京の品川に書簡を呈しているのは不自然なのだが、原史料（「品川文書1　書簡」R12-264-11）を確認する限り消印は確かに明治二八年七月付なので、品川が到着する前に認め、何者かに託して郵送したところ、品川の京都到着と前後してしまった可能性を指摘したい。

（93）明治（三二）年一月一九日付品川弥二郎宛片岡政次書簡（『品川文書』三、四七～四八頁）、前掲明治（二五）年三月一一日付品川宛片岡書簡。

（94）今回マーキングしなかった中にも注目すべき人間関係がある。一例を挙げれば、第二象限上方の中沢岩太と第三象限の天田鐵眼との関係である。中沢は御料局の鉱山事業において品川と協力関係にあった（前掲拙著『皇室財産の政治史』第三章）。一九〇〇年一月一五日には既に京都アカデミア・美術業界で広い人脈を形成していた中沢の家に品川と天田が招かれ、育唖学校生徒の弾琴と揮毫を見聞していることがわかる（「野村文書」R2-5-15）。このような人間関係は、政治史において積極的に発信されることがなかったためか、中沢を中心とする京都のネットワークを研究した並木らも見落としている（前掲並木・青木『京都　近代美術工芸のネットワーク』）。

（95）この他にも「古美術への興味」「教育関係者」など様々な要素が尊攘堂と図1の人びとを結びつけていたと考えられるが、この点に関して「品川マトリクス」を用いた検討は今後の課題としたい。

（96）前田亮介「「モノ」からみた政治史、脱魔術化される「天皇制」――書評池田さなえ著『皇室財産の政治史』」（『歴史科学』二四五、二〇二一年）五〇頁。

（97）V・ターナー著、梶原景昭訳『象徴と社会』（紀伊国屋書店、一九八九年。

初版は一九八一年、原著は一九七四年）。

(98) 前掲伊藤隆編『山県有朋と近代日本』。坂本が伊藤の洋行のメタファーとして用いたトリックスターもまたコミュニタスの一例である。

(99) 国民協会も院内会派「国民政社」とは区別された「倶楽部」組織としてスタートした。

(100) 大日方純夫「政党の創立」（江村栄一編『近代日本の軌跡2――自由民権と明治憲法』吉川弘文館、一九九五年）、山田央子「明治前半期における政党の誕生（一八九〇年）」（季武嘉也・武田知己編『日本政党史』吉川弘文館、二〇一一年）、出水清之助「民権政党停滞期における「無形結合」路線の論理と展開――〈広域地方結合〉の成立を中心に」（『史学雑誌』一二九-一二、二〇二〇年）。

(101) 宮地正人『日露戦後政治史の研究』（東京大学出版会、二〇〇九年。初版は一九七三年）、櫻井良樹『大正政治史の出発――立憲同志会の成立とその周辺』（山川出版社、一九九七年）、手塚雄太『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容――「憲政常道」から「五十五年体制」へ』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）、前掲伊藤陽平『日清・日露戦後経営と議会政治』。

表1　尊攘堂寄付者・寄付額一覧（年代順）

	分類	年	月	日	金額（円）	氏名	備考
1	①	明治26	9	19	25	毛利元昭◎	三井銀行預け、〔毛利家当主〕
2	①	明治26	9	25（※1）	5	柏村信◎	〔萩藩士、毛利家家令、第十五銀行支配人等〕
3	①	明治26	9	25（※1）	1	神代貞介	源頼政神前へ玉串料、〔毛利家家臣ヵ〕
4		明治26	9	25（※1）	0.5	稲垣なを	源頼政神前へ玉串料
5	④	明治26	9	25（※1）	1	佐藤梅太郎◎	源頼政神前へ玉串料、〔鉱業家ヵ〕
6	③	明治26	9	25（※1）	1	堤猷久	〔福岡生、衆〕
7	③⑥	明治26	9	25（※1）	10	田中光顕◎	〔当時宮中顧問官兼帝室会計審査局長官・学習院長〕
8	②⑧	明治28	5	26	1	寺内正毅◎	〔奇兵隊、御楯隊、当時参謀本部第一局長〕
9	④	明治28	5	27	0.5	早瀬巳熊	〔豊多摩郡代々幡村御料地内〕
10	③④	明治28	6	3	0.3	細井金四郎	〔岐阜、農、酒造業、衆（4：国民政社）〕
11	④	明治28	6	12	100	石亀賢次郎◎	伯耆国米久郡西志村大字服部、〔帝国生命保険（株）取締役、後大倉組〕
12		明治28	6	12	10	卯之歳　男	
13		明治28	6	12	3	酉之歳　女	
14	②④	明治28	6	12	1	桂弥市◎	「市、百五十円八十銭入レル」、〔長府の実業家・畜産業〕
15	②③	明治28	6	26	30	松本鼎★☆◎	〔周防国佐波郡生、吉田松陰門下、禁門の変参戦、御楯隊士、衆（1）、貴（M25-M40）〕
16	③	明治28	6	26	25	越智通信★	〔林務官、大阪大林区署長など、後、京都在住〕
17		明治28	6	26	10	光村アサ	〔光村弥兵衛妾ヵ〕
18	④⑤	明治28	6	26	50	西村總左衛門★☆	〔京都、呉服商「千切屋」12代当主、友禅業、貿易商〕
19	⑤	明治28	6	26	50	川島甚兵衛★☆◎	〔京都、川島織物二代目〕
20	⑤	明治28	6	26	10	紹美栄祐★	〔京都、金工家〕
21	④	明治28	6	26	30	田中治兵衛★☆◎	〔京都の書肆「文求堂」主人〕
22	④	明治28	6	26	10	今井定七★	〔京都四条高倉、古中道具商〕
23	②③	明治28	6	26	20	林誠一	〔山口県士族、検事〕
24	②③	明治28	6	26	10	高津慎◎	〔山口生、熊本県警部、三重県書記官など、後、台湾総督府民政局臨時土木部長〕
25	③④	明治28	6	26	10	横田萬寿之助	〔京都、農商務技師など、貿易商、後、五二会撚緬整〕
26	③	明治28	6	26	10	山田信道◎	〔熊本生、大阪府知事など地方官を歴任〕
27	③	明治28	6	26	10	古沢滋◎	不納、〔土佐生、政治家、官僚〕
28	③	明治28	6	26	5	中村治郎	〔長崎県書記官、三重県書記官など〕
29	②③	明治28	6	26	1	長岡往来	〔山口生、後、東京芝区長〕
30	②③	明治28	6	26	100	野村靖☆◎	〔長州生、政治家、当時内務大臣〕
31	④	明治28	8	14	25	池田清助★☆	〔京都、五二会京都雑貨部長、美術・貿易商〕
32	④	明治28	8	14	15	池田清右衛門	〔雑貨売込商、神戸商業会議所所属、清助の息子〕
33	④	明治28	8	14	30	林新助★☆	〔京都、美術商、美工商社設立発起人〕
34	②⑧	明治28	8	15	30	阿武素行★☆	〔周防生、軍人、元奇兵隊士〕
35	②	明治28	8	15	0.5	時山信之	〔時山直八親族ヵ〕
36	②③	明治28	8	15	10	周布公平◎	〔長州生、政治家、官僚、当時兵庫県知事〕
37	②④	明治28	8	15	100	豊永長吉◎	〔長府生、実業家、銀行家、炭鉱など経営、真宗信徒生命、衆（8）〕
38	③④	明治28	8	15	10	高井幸三◎	〔大阪生、真宗信徒生命保険（株）・起業銀行役員、衆（2、3：国民協会）〕
39		明治28	8	15	5	八木良則☆	〔京都〕
40	⑤	明治28	8	15	5	田中利七★☆	〔京都、美術刺繍作家、美工商社設立発起人〕
41		明治28	8	15	0.5	三木貫朝	小豆島福田村
42	⑤	明治28	8	15	10	並川〔河〕靖之★☆	〔京都、七宝家、五二会七宝部長、後帝室技芸員〕
43	④	明治28	8	15	10	奥村芳次郎	〔京都、鋳物商〕
44	⑤	明治28	10	20	1	川井仙郎	〔京都、篆刻家、金石学〕
45		明治28	10	28	10	井上正幸	〔大阪府〕
46	②	明治28	10	28	2	田中稔助	〔遊撃隊監軍、山口藩常備軍編成掛〕
47	④	明治28	11	1	20	川崎正蔵	〔兵庫、実業家、川崎造船所創業者〕
48	④	明治28	11	1	100	光村利藻	〔兵庫、光村弥兵衛長男、後光村印刷創業〕
49	④	明治29	3	31	20	安生順四郎◎	〔栃木、実業家、公共事業家〕

（表1つづき）

	分類	年	月	日	金額（円）	氏名	備考
50	④	明治29	3	31	20	矢板武◎	〔栃木県矢板農場経営者〕
51	④⑥	明治29	4	28	1.5	住江常雄	熊本県飽託郡横手村、〔敬神党、神風党総代、後、九州鉄道監査役〕
52		明治29	4	28	0.5	右田喜七郎	熊本市、〔敬神党〕
53		明治29	4	28	2	小杉元雄	熊本県荒本郡玉荒村
54		明治29	4	28	5	坪井間〔多〕三郎	神戸市、〔時計商ヵ〕
55	④	明治29	4	28	3	松浦有平	神戸市、〔紙商〕
56	④	明治29	4	28	50	住友吉左エ門◎	大阪市、〔住友家当主〕
57	④	明治29	4	28	25	広瀬満正	神戸市、〔広瀬宰平長男、実業家〕
58	④	明治29	4	28	7	山本亀太郎（※2）	神戸市、〔貿易商、茶業、兵庫県五二会本部長〕
59	④	明治29	4	28	3	兼松房次郎	神戸市、〔尾張生、貿易商〕
60	④	明治29	4	28	3	柴田喜蔵	大阪市、〔実業家ヵ〕
61	④	明治29	4	28	5	芝川又右衛門	大阪市、〔農業、大阪殖林・日本蒔絵会社役員、多額納税者〕
62	④	明治29	4	28	2	杉山利介	神戸市、〔市会議員、呉服太物商など〕
63	④	明治29	4	28	1	大井卜新	大阪市、〔紀伊生、貿易業、医師、衆（9、10）〕
64	④	明治29	4	28	2	賀集寅二（次）郎◎	淡路国三原郡、〔淡路紡績（株）重役、後社長、兵庫県官員経験有〕
65	④	明治29	4	28	1	多田弥三郎	〔光村家支配人〕
66		明治29	4	28	1	伊東勝次郎	
67	④	明治29	4	28	0.5	泉谷氏〔氏〕一	〔後、関西写真製版印刷合資会社社員＝光村関係者〕
68	⑤	明治29	4	28	0.5	小島保光	〔福井生、神戸、写真家〕
69		明治29	4	28	0.5	鳥居定吉	
70	④	明治29	4	28	1	鈴木助七	〔神戸、旅人宿、回漕業〕
71		明治29	4	28	0.5	八木嘉伝次	
72	④	明治29	4	28	1	河井貞一	〔兵庫、県勧業課在勤経験有、日本貿易倉庫株式会社社員〕
73		明治29	4	28	0.5	郡司幸一	
74	④	明治29	4	28	10	芝原嘉兵衛	〔京都、京都株式取引所・真宗信徒生命保険（株）・起業銀行役員〕
75	④	明治29	7	8	5	深見伊兵衛★☆	〔京都、海産物・外国米・肥料商、京都倉庫副社長〕
76	④	明治29	7	8	5	川端弥七☆	〔京都、乾物商〕
77		明治29	7	8	1	竹岡タツ	
78	③	明治29	7	8	5	松田茂太郎	〔技師、後台湾総督府専売局〕
79	⑧	明治29	8	1	0.5	佐々木半蔵	〔軍人ヵ〕
80	②⑧	明治29	8	1	0.5	村上昌輔	〔山口、軍人ヵ〕
81		明治29	8	7	0.5	中野小学校	
82		明治29	8	20	2	平賀義夫◎	〔工学博士平賀義美長男〕
83	⑧	明治29	8	22	0.5	岩本京輔	〔軍人ヵ〕
84	②	明治29	8	30	5	村田峯次郎◎	〔長州生、歴史家、清風長男、『品川子爵伝』作者〕
85	②④	明治29	11	10（※1）	50	藤田伝三郎◎	〔長州生、大阪、藤田組創始者、実業家〕
86	③④⑥	明治29	11	10	5	鳴滝幸恭	〔京都生、神戸市長など、実業家、戊辰戦争に従軍〕
87	②③⑧	明治30	2	7	15	梶山鼎介◎	〔元長府藩士、報国隊、陸軍中佐、衆（4：国民協会）〕
88	⑥	明治30	2	7	15	松尾珍臣	信濃国下伊那郡神稲村
89	④⑥	明治30	2	7	20	福澤三郎	信濃国上伊那郡赤穂村、〔（株）庚子銀行頭取〕
90	⑥	明治30	2	7	10	北原阿智之助	信濃国下伊那郡上郷村、〔村長、衆（17、19、20）〕
91	⑥	明治30	2	7	5	前澤巌雄	信濃国上伊那郡片桐村
92	⑥	明治30	2	7	5	小町谷英太郎	信濃国上伊那郡赤穂村、〔戸長〕
93	⑥	明治30	2	7	20	間鷲郎	美濃国恵那郡中津川町、〔間秀矩の孫〕
94	④⑥	明治30	2	7	5	上柳喜右衛門	信濃国下伊那郡飯田町、〔名望家〕
95	④⑥	明治30	2	7	10	木下與八郎	信濃国下伊那郡飯田町、〔上柳の親族、飯田町長など〕
96	④⑥	明治30	2	7	5	伊原五郎兵衛	信濃国下伊那郡飯田町、〔実業家〕
97	⑥	明治30	2	7	5	前島直太郎	信濃国下伊那郡大鹿村
98	⑥	明治30	2	7	5	大原慶一	信濃国下伊那郡神稲村
99	⑥	明治30	2	7	5	温田知三郎	信濃国下伊那郡泰阜村

（表1つづき）

	分類	年	月	日	金額（円）	氏名	備考
100	⑥	明治30	2	7	5	木下重太郎	信濃国下伊那郡鼎村
101	⑥	明治30	2	7	10	北原信綱	信濃国下伊那郡坐光寺村、〔名望家、衆（4）〕
102	②⑧	明治30	6	12	20	岡澤精	〔山口生、軍人〕
103	⑦	明治30	6	22	5	上田実	山口県吉敷郡大道村、〔農、国民協会、衆（7、8）〕
104		明治30	6	27	1	中嶋勘兵衛	
105	⑦	明治30	6	27	1	某	山口県
106	⑦	明治30	8	2	10	周防国吉敷郡大道村（上田実）ほか10名	4日預け
107	⑦	明治30	8	2	10	古林重次郎	山口県吉敷郡小郡村
108	⑦	明治30	8	2	5	本間源三郎◎	山口県吉敷郡嘉川村、〔村吏、名望家、国民協会、旧藩農兵〕
109	④⑦	明治30	8	2	5	徳田譲甫	山口県吉敷郡井関村、〔実業家、県会議員など〕
110	⑦	明治30	8	2	5	林秀一	山口県吉敷郡小鯖村
111		明治30	11	28（※1）	1	太田祥介	〔八重山役所長ヵ〕
112	④	明治30	11	19	5	岡田善四郎	磐城国田村郡大越村、〔村吏、実業家、国民協会〕
113	④	明治32	4	30	10	真宗信徒生命保険株式会社	
114		明治32	5	23	1	産田喜三郎	福井県今立郡鯖江町
115	⑤	明治32	6	26	1	富岡鉄斎	〔京都、画家、学者〕
116	④⑤	明治32	7	15	30	飯田新七★☆	〔京都、呉服商、美術商、貿易商、高島屋当主〕
117	③	明治32	7	20	0.5	桑原省之輔	和歌山県庁〔県内務部十等属〕
118	⑤	明治32	9	25	5	清水六兵衛★☆	〔京都、製陶家、五二会、京都陶磁器商工組合〕
119		明治32	9	25	0.6	井上致廣・吉岡軍四郎	熊本県熊本市・同県八代郡植柳村
120	④	明治32	12	8	100	岩下清周	北浜銀行、〔長野生、実業家〕
121	④	明治32	12	18	10	内藤小四郎☆◎	〔京都、五二会京都綿ネル役員〕
122	④	明治32	12	25	30	辻信次郎・辻忠四郎・辻忠三郎☆◎	〔京都、博覧会元金社中、信次郎は元区長、五二会〕
123	④	明治33	1	15	10	安盛善兵衛☆◎	〔滋賀生、呉服洋反物商、五二会京都綿ネル役員〕
124	④	明治33	1	27	10	藤村岩次郎☆◎	〔京都、京都商業会議所常議委員、五二会京都綿ネル役員〕
125	④	明治33	4	8	10	竹村弥兵衛☆	〔下京区、洋反物商〕
	計				1586.4（※3）		

（※1）来堂日ではなく預金日。

（※2）「神戸市商工業者資産録」（渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧　兵庫編1』〈日本図書センター、1991年〉所収）には、もう一人同姓同名の株式会社村井兄弟商会神戸支店長が見えるが、品川との関係から考えると、前田正名の提唱にかかる五二会の製茶部門で本部長を務める山本亀太郎の蓋然性が高いと判断した。

（※3）各寄附金額を古澤滋の不納分10円も含めて合計すると1590円90銭、不納分を含めずに合計すると1580円90銭となるが、「尊攘堂資金有志者人名録」記載の金額を入力した。

註1：「年」「月」「日」「金額」「氏名」の欄は「尊攘堂資金有志者人名録」（「品川文書１　書類」R80-1631）を基本として、「尊攘堂資金有志者人名録」（同、R80-1632）と対照して確定させた。「分類」欄の番号については、以下の通り。①毛利家関係者、②旧長州藩士、③政治家・官員、④実業家、⑤美術工芸作家、⑥維新志士関係者（長州藩以外）、⑦山口県出身者、⑧軍人、無番号：その他・不明。一人の人物において二つ以上の分類にまたがる肩書・経歴を持つ場合は、複数の番号を併記した。①は毛利家の人物、及び毛利家家政スタッフのみを分類した。②の「旧長州藩関係者」は「維新志士」でもあった人物も多く含まれるが、⑥と併記していない。美術工芸作家でもあり営業者でもある人物に関しては、制作を主たる活動としていると判断できる場合は⑤単独とし、それ以外は④と併記した。後に議員となる者や議員・官員経験・軍歴のある者に関しては、勤続年数の長さや本務と思われるものにより判断し分類した。⑦は、旧藩士でないと判断できる者のみを分類した。

註2：名前の後ろに◎印のあるものは、「品川文書1　書簡」、「品川文書1　書類」、「品川文書2　書簡」、「品川文書2　書類」、『品川文書』1～8中に来翰のあるものを指す。

註3：名前の後ろに★印のあるものは後に尊攘堂保存委員となる者を（「尊攘堂保存ノ趣旨」〈「品川文書1　書類」R 80-1636〉）、☆印のあるものは京都帝国大学移管後の「尊攘堂委員」となる者を指す（京都帝国大学附属図書館編刊『尊攘堂誌』1940年、25～26頁）。

註4：備考欄・「衆（回次）」は衆議院議員歴、「貴（期間）」は貴族院議員歴を示す。

註5：「尊攘堂資金有志者人名録」には明治33年2月3日に2件の物品寄付も記載されているが、これらについては表2にまとめた。

註6：「備考」欄は、「尊攘堂資金有志者人名録」に記載のあるものはそのまま記載し、〔　〕は以下の文献を用いて経歴等を補った。備考欄・出身地は「○○生」、居住地は単に地名のみを記した。寄付時点の肩書については「当時○○」、履歴は単に列挙し、寄付時点以降の経歴については「後、○○」と記した。肩書は、主な家業がある場合は「○○業」、複数の事業設立に関与している場合には単に「実業家」とした。

参考文献

「尊攘堂記」（「品川文書1　書類」R 80-1637）、国立公文書館所蔵「職員録」、乙葉宗兵衛『西京人物志』（村上勘兵衛、1879年）、石田才次郎編『買物必携今世京羽二重』（石田有年、1884年）、浅田長次郎（愛鳥道人）『三重県職員人物評――一名・官吏の腕くらべ』

（表1つづき）

（北村活版所、1890年）、桜井敬太郎等『京都府下人物誌　第1編』（金口木舌堂、1891年）、公評散史『兵庫県人物評』1～4（神戸同盟出版社、1892～1896年）、児玉九峯・藤田桜鉄『濃飛名誉人物評　下』（濃飛名誉会、1894年）、辻本治三郎編『京都案内都百種』（尚徳館、1894年）、『日本紳士録　第三版』（交詢社、1896年）、藤井公平等著『兵庫県代議士候補人物公評録』（大東社、1898年）、梅田正勝編『全国多額納税者互選名鑑』（溝口摂弥、1898年）、田中彦次郎編『明治肖像録』（帝国史会、1898年）、『衆議院要覧』（衆議院事務局、1898年）、倉田熱血『近畿実業家列伝　付　天忠党大和義士伝』（不朽社、1899年）、牧野元良編『大日本商工名鑑』（商業興信所、1899年）、『欧米商工視察報告書』（京都商業会議所、1900年）、観風庵主人『商界の人物』（小谷書店、1903年）、宮村無声『成功と失敗』（又間精華堂、1903年）、大阪朝日新聞社編『人物画伝』（有楽社、1907年）、『無資奮闘成功家実歴――最新実業家立志編』（実業力行会、1907年）、大月隆『成功百話』（文学同志会、1910年）、大阪商業会議所編『大阪商工名録』（梅田芳三、1911年）、岩下清周『藤田翁言行録』（岩下清周、1913年）、東洋新報社『大正人名辞典』（東洋新報社、1917年）、『大阪薪炭商名鑑』（関西薪炭商報社、1935年）、「売買ひとり案内」（新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』6、臨川書店、1985年）、「京都土産」（新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』10、臨川書店、1985年）、「西京人物誌」（新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』9、臨川書店、1986年）、「京華要誌」上（新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』3、臨川書店、1987年）、「京都新繁昌記」（新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』8、臨川書店、1987年）、京都出版史編纂委員会編『京都出版史――明治元年―昭和二十年』（日本書籍出版協会京都支部、1991年）、上川芳実「明治期京都商業会議所の議員構成」（『（同志社大学）社会科学』47、1991年）、同「明治31年大阪府の企業家集団」（『京都学園大学経営学部論集』7-2、1997年）、同「明治期京都市の企業家層」（『同志社商学』50-5・6、1999年）、同「明治期大阪市の企業家層」（『大阪大学経済学』54-3、2004年）、泉健「『Ost=Asien』研究　その3　人名注解；日本人編」（『和歌山大学教育学部紀要．人文科学』54、2004年）、秋元せき「明治期京都の名望家と行政」（京都映像資料研究会編『古写真で語る京都』淡交社、2004年）、小林丈広「都市名望家の形成とその条件――市制特例京都の政治構造」（『ヒストリア』145、1994年）、同「京都公民会と都市商工業者」（『キリスト教社会問題研究』59、2010年）、佐藤英達『藤田組の発展――その虚実』（三恵社、2008年）、山本真紗子『唐物屋から美術商へ――京都における美術市場を中心に』（晃洋書房、2010年）、安岡昭男編『幕末維新大人名事典』（新人物往来社、2011年）、徳田武『朝彦親王伝――維新史を動かした皇魁』（勉誠出版、2011年）、愛知県陶磁資料館学芸課編『陶家の蒐集と制作Ⅰ――清水六兵衛家　京の華やぎ』（愛知県陶磁資料館、2013年）、並木誠士・青木美保子編『京都　近代美術工芸のネットワーク』（思文閣出版、2017年）、山本真紗子「美術貿易黎明期の京都とロンドン――美術商池田清助とトーマス・J・ラーキン」（並木誠士編『近代京都の美術工芸――制作・流通・鑑賞』思文閣出版、2019年）、武藤夕佳里『並河靖之と明治の七宝業』（思文閣出版、2021年）、並河徳子「父をかたる」（非売品）、『日本全国諸会社役員録』、『日本全国商工人名録』、『官報』、『東京朝日新聞』、『大阪朝日新聞』、『読売新聞』、『東京日日新聞』、『日本人名大辞典』、徳富蘇峰記念館HP、「幕末明治の写真史総覧」HP、「『人事興信録』データベース」、『品川文書』1～8。

表2　尊攘堂物品寄付者一覧

寄付者	寄付物品（寄付年月日）	経歴
田中光顕◎	高杉晋作萩獄中之詩弧月第二　武市半平太瑞山之画	表1参照
松本鼎★☆◎	松浦松洞画　群鶴之図	表1参照
窪田畔雄	佐久間象山先生自賛山水之図（明治28年6月）	佐久間象山門人
森寛斎◎	（自作）千島之図、人体的、夏ノ不二の図、加茂御幸の図、猪ノ図、十萬堂女人形記、源三位頼政卿肖像	日本画家、萩生、京都画壇における円山派正系
近藤芳樹	千島之図（賛歌）	国学者、周防邦吉敷郡生、明治13年没
山田卯之助	京大火之図	〔奈良県生の山田卯之吉ヵ〕
柴垣弥兵衛老婆	維新山口諸隊会議所ニ於テ奇兵隊其外書　各隊将士	但馬の豪農
川崎紫山〔三郎〕	藤田東湖　豊田　二先生詩	歴史家、『戊申戦史』著者
吉田黙老人	平井隈山自画賛梅	尊攘運動家、京都生、寺侍、維新後は神職
西村心斎	梅田雲浜　朱文公之一聯	〔朝倉ヵ：『田中河内之助傳』校閲〕
紅屋新助	三条実萬公　天照神号	長堀心齋橋、紅商
河村淳	水戸烈公石摺	政治家、帝国党代議士
梧庵和尚◎	天王山殉難十七士（眞木和泉所持の軍扇・久坂玄瑞の軍中日誌・宍戸九郎兵衛の大瓢）（※1）、刀	建仁寺中浄光院高台寺住職橘鄧林。禁門の変の際、左遺品を拾い、有志者に送った勤王僧
谷鉄臣	三条実美公長門集義隊之旗　甲子ノ乱ニ用イシモノ	旧彦根藩士、医者、近江生、宮内省京都支庁御用掛など
久保田米僊	長州兵入京之図	日本画家、京都生、京都府画学校設立に奔走
池村弥兵衛	松本謙三郎七絶	書肆
雨森善四郎	大原重徳卿　自画賛	白水とも、京都生、明治14年没、古書画愛好家・鑑定家
井室伊兵衛	大原重徳卿尊攘の弐字	〔飯室ヵ：好古家〕
白瀬甚右衛門	佐久間象山七絶	松代の人
大庭景秋	中山侍従忠光公書状	長府、柯公とも、白石正一郎の弟である大庭傳七の三男
伊原昴	竹内式部号　王瑾　天龍道人葡萄ノ図	土佐出身、幕末は田中光顕とともに尊攘運動に従事
薬袋義一◎	竹内式部号　木鳥図、柳鶯の図	山梨出身、政治家、国民協会所属
北原郡長	常陸ノ人大阪坐摩詞官　佐久羅東雄長歌	長野県下伊那郡坐光寺村の北原信綱
福羽美静◎	同上、船越清蔵守愚	津和野出身、国学者、貴族院議員
三木直	宰相書牘　茨木〔ママ〕県水戸士　壱幅	水戸生、幕末国事に奔走、維新後は神官等を歴任
西田茂八郎・北垣伝右衛門	松本圭堂書幅一軸（明治33年2月3日）	西田は淡路の実業家、米穀改良に尽くす、豪商
北垣伝右衛門◎	藤森弘庵書幅一軸（明治33年2月3日）	但馬朝来郡生、兵庫県会議員

（表2つづき）

寄付者	寄付物品（寄付年月日）	経歴
村山遯軒	伴林光平、清川八郎、藤本鉄石の書簡横巻。富岡鉄斎に題字依頼（明治28年12月）（※2）	新潟県三条の人
杉孫七郎◎	三条実萬書（※3）	長州出身、宮内省内蔵頭、皇太后宮大夫等
平賀義夫◎	不明（※4）	表1参照
西村敬蔵	田中河内之介綏猷短冊（明治21年8月26日）（※5）	但馬の人、田中河内之助や諸藩の志士を資金面で支える、宮内省御用掛（京都支庁出仕）

（※1）明治21年8月28日・30年8月15日『日出新聞』より。
（※2）『品川文書』5、58～59頁より。
（※3）国立国会図書館憲政資料室寄託「杉孫七郎関係文書」40-6より。
（※4）『品川文書』6、69～70頁より。
（※5）その後明治21年12月までに加藤源兵衛に譲渡され、幕末期に収集されたと思われる瓦版や尊攘堂関係史料とともに「七生之巻」としてまとめられた。現在は京都文化博物館に寄託されている。同人の寄付については、京都文化博物館学芸員・植田彩芳子氏、同西山剛氏よりご教示いただいた情報に基づく。

註：※が付されている件以外は全て、「目録　尊攘堂」（「品川文書1　書類」R80-1629）から判明する限りの物品寄付者を列挙したものである。経歴は表1の註に記載の諸史料のほか、『浪花買物独案内』（昇旭堂等、1867年）、猪飼定次郎『万年青培養法　絵入新編』巻1（池村弥兵衛、1883年）、松村巌『維新史談』（田中治兵衛、1893年）、桑島蚕造『鉄将遺稿』（大庭景秋、1895年）、豊田小八郎『田中河内介伝』（繁本良之助、1900年）、服部鉄石『茨城人物評伝』（服部鉄石、1902年）、小林丈広『明治維新と京都――公家社会の解体』（臨川書店、1998年）、京都芸術大学芸術資料館HP「美術家略歴」（http://libmuse.kcua.ac.jp/muse/bio/amenomorihakusui.html）、『世界大百科事典』を参照した。名前の後の記号については表1参照。

表3　尊攘堂参拝者抜粋（明治20年～33年）

年	月	日	祭典	参拝者
明治21	8	26	✓	九鬼〔隆一〕図書頭、槇村〔正直〕元老院議官、乃木〔希典〕少将、松本〔鼎〕和歌山県知事、馬屋原〔二郎〕神戸始審裁判所長、本願寺法主〔大谷光尊〕、森寛斎、和田義亮、吉井義之、梧庵禅師、久坂秀次郎、弥平治の老母、森口忠兵衛ら
明治24	6	26		松本鼎、富岡鉄斎、森寛斎等参集、祭典執行（以後、毎年同日頼政忌を例祭日と定める）
	8	23	✓	田中治兵衛（主催）・吉田黙・谷鉄臣・森寛斎・島地黙雷・大洲鉄然ら、及び京都在住長州人数名
	10			清岡公張、吉田庫三、江木千之
明治25	4			陸実、岡崎邦輔等
	6	26	✓	松本鼎、森寛斎、富岡鉄斎等16名参集（例祭）
	8	18	✓	斎主・品川弥二郎、森寛斎、松本鼎、大越亨、谷鉄臣、越智通信、近藤芳介、阿武素行、革島有尚、福寿梧庵、吉田黙、北垣国道、伊集院兼常、山本復一、大洲鉄然、赤松連城、篠田時化雄、鈴木松年、木下凞ら、及び維新殉難志士遺族、絵師、商工業者、新聞社員等250余名
明治26	5			寺島秀介（男）
	6	26	✓	松本鼎等8名（例祭）
	9	5（※1）	✓	斎主・豊国神社宮司柴崎宣弘、祭官十数人、山階宮晃親王、賀陽宮邦憲王、久邇宮多嘉王、毛利元昭、蜂須賀茂韶（来賓）、阿武素行、松本鼎（祭主）、北畠〔治房〕控訴院長、渡辺〔昇〕会計検査院長、清岡〔公張〕、北垣〔国道〕、千田〔貞暁〕、周布〔公平〕兵庫県知事、石田〔英吉〕高知県知事、長谷川〔為治〕造幣局長、桂〔太郎〕陸軍中将、山根〔信成陸軍〕少将、真鍋〔斌陸軍〕大佐、伊丹重賢、岩村高俊、中井弘、小室信夫の4貴族院議員、遠藤謹介、井上勝、渡辺清、西村捨三、伊集院兼常、藤田傳三郎、馬屋原〔二郎〕神戸裁判所長、久保〔秀景〕津裁判所検事正、加太〔邦憲〕京都裁判所長、楠〔正位〕同検事正、宇田〔淵〕主殿助、平川〔潤亮〕京都郵便局長、高津〔慎〕三重県参事官、三橋〔勝到〕京都府警部長、平賀義美、荒川新一郎、京都市郡部会議長、常議委員、京都市会議長、市参事会員、中川武俊、大谷光尊、近藤春香、遺族・小野幸助、平野次郎等（以上福岡）、梧庵和尚、〔天然〕滴水禅師、催主・品川弥二郎、尾越〔泰輔〕京都府書記官、近藤芳介、阿武〔素行陸軍〕少将、松本〔鼎〕貴族院議員、河田景福等数十名、ほか紳士・豪商等約200名
明治28	4			柏田盛文等
	5			寺内正毅等
	6	26	✓	松本鼎、富岡鉄斎、近藤芳介、天田鉄眼、川崎三郎、川島甚兵衛、西村總左衛門等参集（例祭）
	7	12～	✓	数百名
明治29	4			井関美清
	6	26	✓	松本鼎、富岡鉄斎等29名参集（例祭）
	8			田中一介、村田峯次郎

（表3つづき）

年	月	日	祭典	参拝者
	8	27	✓	阿武素行、松本鼎ほか有志者、山階宮晃親王、賀陽宮邦憲王、村雲日栄尼、山縣有朋、六角〔博通〕子爵、内海〔忠勝〕、沖〔守固〕、北畠〔治房〕大阪控訴院長、林〔誠一〕大阪控訴院検事長、馬屋原〔二郎〕大阪地方裁判所長、加太〔邦憲〕京都地方裁判所長、楠〔正位〕同検事正、二宮監軍附武官、小畑〔美稲〕・小室〔信夫〕両貴族院議員、大谷派法主代理日野澤依、大洲鉄然、利井明郎、宇田淵、河田景福、近藤芳介、黒岩直方、浜岡光哲、高木文平、富岡鉄斎、山本章夫、毛利元昭代理田中一介、京阪の新聞社員、嵯峨地方有志者等数百名、久坂玄瑞遺族秀二郎、寺島忠三郎遺族秋介、福原越後遺族俊丸ほか遺族十数名
明治30	1			梶山鼎介、和田彦次郎
	4			柴田家門、波多野承五郎
	5			大原重徳（侯）
	6	26	✓	阿武素行、富岡鉄斎、鳥尾小弥太等30名参集（例祭）
	6			岡澤精（男）
	8			末松謙澄（男）
	8	15（※2）	✓	山縣有朋、鳥尾小弥太、阿武素行
	11			山岡直記（子）
明治31	6	26	✓	松本鼎、阿武素行、富岡鉄斎等、木下廣次以下京大職員25名参集（例祭）
明治32	6	26	✓	富岡鉄斎、中沢岩太ほか23名参集（例祭）
明治33	6	8		品川弥二郎追悼会、在京都縁故者参集

（※1）霊山招魂場を祭場として執行された。

（※2）天龍寺を祭場として執行された。

註1：「祭典」欄にチェックの入っているものは尊攘堂例祭や招魂祭などの祭典時の参拝者を、それ以外のものは平常時の尊攘堂への来堂・参拝者を示す。

註2：祭典時の参拝者については『品川文書』1～8、『日出新聞』、『大阪日報』、『読売新聞』により判明する人名を、平常時の参拝者については京都帝国大学附属図書館編刊『尊攘堂誌』（1940年）所載「尊攘堂年譜」より、尊攘堂建立の明治20年から品川弥二郎逝去の同33年までに確認できる参拝者情報を抽出した。

註3：明治27年は日清戦争の影響により、例祭は中止された。

表4　DB2登場人物一覧

DB2に登場する人物	経歴
川島甚兵衛★☆◎	表1参照
前田正名◎	農商務省官僚、五二会創設、地方在来産業指導者
田中治兵衛★☆◎	表1参照
伊藤博文◎	政治家、長州出身
大谷光尊◎	真宗本願寺派管主
小田佛乗◎	真宗本願寺派役僧
伊庭貞剛◎	近江出身、住友第二代総理事など、衆（1）
吉井義之	但馬生、生野の変に参加、後奇兵隊入隊、禁門の変で負傷、戊辰戦争従軍、維新後は京都府に勤務
富岡鉄斎	表1参照
小和野廣人	大和国宇知郡小和野野原村郷士、20歳で出家（浄土宗）、天誅組の変に参加、高野山に挙兵した鷲尾隊に参加、その後集議隊を結成し宮門経営にあたる、明治2年横井小楠暗殺の嫌疑で幽閉、のち種々の反政府行動の嫌疑で獄を出入、不平士族とともに政府転覆計画に参加したとして終身刑となり明治5年鹿児島獄に移送、西南戦争の6年後釈放され帰郷、東京・京都と居を変えたのち、神道教導職に任じられ権大教正となる。明治22年病のため京都入り、明治24年帰郷
高橋九右衛門	富岡鉄斎・吉井義之・小和野廣人らとともに明治21年の禁門の変の殉難者記念祭・遺墨展覧会に饗応を受ける
木村弁之進	土佐陸援隊士、富岡鉄斎・吉井義之・小和野廣人らとともに明治21年の禁門の変の殉難者記念祭・遺墨展覧会に饗応を受ける
石田誠之助	富岡鉄斎・吉井義之・小和野廣人らとともに明治21年の禁門の変の殉難者記念祭・遺墨展覧会に饗応を受ける
森寛斎◎	表2参照
久万裕◎	高知出身、農商務省林務官（明治20）、以後京都・秋田・熊本・広島の各大林区署長を歴任、明治31年逓信省入省。在官時品川には御料林についても意見
近藤幸止◎	亀山藩家老次男、熊本県一等属、内務一等属など、真宗信徒生命社員
大洲鉄然◎	真宗本願寺派役僧、長州出身、幕長戦争に従軍（第二奇兵隊）
坂本則美◎	京都の政治家、川島甚兵衛を支援
荒川新一郎◎	山口出身、イギリスに留学し紡績学を学ぶ、のち農商務省御用掛。品川とは会社の経営・人事や京都織物会社の紛議の件について相談関係にあった
山縣有朋◎	政治家、長州出身
広瀬宰平◎	近江生、住友初代総理事
井上馨◎	政治家、長州出身
益田孝◎	佐渡出身、三井組入社、三井物産立ち上げ、初代総轄
中井弘◎	薩摩出身、英国日本公使館書記官、滋賀県知事、貴族院議員など
片岡政次◎	品川家農牧場管理者、真宗信徒生命東京支店長
赤松連城◎	真宗本願寺派役僧、「防長グループ」
佐々友房◎	熊本出身、政治家、国民協会所属
中西牛郎◎	仏教系ジャーナリスト、真宗本願寺派信徒
陸奥宗光◎	政治家、紀州出身、農商務大臣等
天然滴水◎	臨済宗僧侶、文久3年（1862年）、41歳の時に天龍寺西堂に任命され、禁門の変に罹災、明治維新後は臨済宗天龍寺派管長など
田口秀実◎	大洗神社宮司
北垣国道◎	政治家、京都府知事、北海道庁長官など
半井真澄◎	今治出身、医師、故実家
渥美契縁◎	真宗大谷派僧侶
大越亨◎	農商務省勧農局、石川県少書記官、徳島県大書記官、熊本県大書記官など
阿武素行★☆	表1参照
岩村〔高俊〕◎	高知出身、戊辰戦争従軍、石川、愛知、福岡、広島の県令や知事を歴任
松本鼎★☆◎	表1参照
高津慎◎	表1参照
早川龍介◎	愛知県農、愛知県会議員、同副議長、衆（1～当選10回）、第1回議会では中立派、三河分県論主唱者。明治25年8月品川の国民協会遊説途次の滞京では神戸への出発を見送る
小原迪	大垣藩家老の家に生まれる、維新後大垣藩大参事、本保県権知事等、岐阜県代議士、男爵。明治25年8月品川の国民協会遊説途次の滞京では神戸への出発を見送る

（表4つづき）

DB2に登場する人物	経歴
今井磯一郎	愛知県農商、衆（1～4）、第一回衆議院議員総選挙では僧侶を遊軍として後ろ盾として勢力を拡大し、大同派と選挙戦を戦って勝利。無所属中立派だが保守寄りとされる。愛知県会議員となり、三河分県論の賛成者の一人。愛知県常置委員、徴兵参事員、地方山林会議員、岡崎商業会議所会頭、岡崎米穀取引所理事長、三河電力株式会社社長など。明治25年8月品川の国民協会遊説には京都から佐々友房とともに付き従う
五十嵐光彰	京橋、周旋業・通信業。明治23年清浦奎吾の肝入りで国費を投じて設立された通信社（後の東京通信社）の第二代主幹。明治25年8月品川の国民協会遊説には京都から佐々友房とともに付き従う
高井幸三◎	表1参照
島地黙雷◎	真宗本願寺派役僧、山口生
村田峯次郎◎	表1参照
香川〔葆晃〕◎	真宗本願寺派役僧、「防長グループ」
水本	真宗本願寺派僧侶
片山〔東熊ヵ〕	長州（萩）出身、奇兵隊に所属、維新後は建築家、宮内省内匠寮など
堀内	不明、品川に添書を求めて来訪
越智通信★	表1参照
鳥尾小弥太◎	奇兵隊出身、陸軍中将、保守中正派結成、子爵、禅宗に帰依
並河靖之★☆	表1参照
小川治兵衛	京都生、作庭家、品川の京都滞在時に面会する関係
飯田新七★☆	表1参照
池田清助★☆	表1参照
林新助★☆	表1参照
横田萬寿之助	表1参照
金原明善◎	静岡生、実業家、地方名望家、品川を介して川島甚兵衛を支援
光村利藻	表1参照
平賀義夫◎	表1参照
毛利〔元昭〕◎	表1参照
柏村〔信〕◎	表1参照
神代〔貞介〕	表1参照
渡辺昇◎	肥前出身、尊攘運動家、維新後は大阪府知事、元老院議員、参事院議官、会計検査院長など、子爵
松田芳次郎◎	京都・綴喜郡の人、軍人、尊攘堂を訪れトンヤレ節を一部所望
豊永長吉◎	表1参照
安達謙蔵◎	熊本出身、政治家、国民協会所属
村田寂順◎	妙法院高僧、妙法院が維新によって多大なる打撃を受けたことから保勝会の京都側議員となり復興に期待する、品川に妙法院積翠園の皇室への献納を依頼
高嶋〔鞆之助ヵ〕◎	鹿児島出身、戊辰戦争に従軍、維新後は軍人、第一次松方内閣で陸軍大臣など
石田〔英吉〕知事◎	土佐出身、天誅組の挙兵に参加、幕末には大洲と合流し第二奇兵隊を組織、維新後は長崎県令、千葉、高知県知事などを経て貴族院議員
利井明郎◎	真宗本願寺派役僧、「防長グループ」
山本復一◎	京都出身、岩倉具視秘書、本草学者山本亡羊の孫、自身も本草学者、京都の旧跡保存に関して品川と協力関係
桂弥市◎	表1参照
杉民治◎	吉田松陰の兄、維新後松下村塾再興、教育者、真宗信徒・国民協会支持者ヵ
大岡育造◎	山口生、『中央新聞』主筆、国民協会所属。衆（1～3、5～11、13～15）
川崎三郎◎	表1参照
佐々木陽太郎◎	宮内省御料局で品川の下僚・御料局主事を務める
勝間田稔◎	長州（萩）出身、戊辰戦争に従軍、維新後は各県知事を歴任
塚本老人	不明
辻〔信次郎〕☆◎	表1参照
寺内正毅◎	表1参照
山田〔春三〕	長州（萩）出身、岩手・山梨・奈良県等で書記官を務める
武石貞松◎	新潟出身、教育者、漢学者、大竹貫一（漢学愛好家・真宗門徒・大日本協会から進歩党・骨董趣味者）の支持者で伝記を著す。新潟県三条の村山遯軒より尊攘堂に物品献納品を取り次ぐ
野村靖☆◎	表1参照
阿部市郎兵衛◎	近江生、実業家、真宗信徒生命・起業銀行発起人・重役、本願寺派護持会の総取締を任ずる
山本豊躬	旧幕臣渡邊昌洪の二男、維新後は浜松県十三等出仕、大蔵書記官など、起業銀行経営陣に招かれる
松方正義◎	政治家、薩摩出身
今小路洪範	伯耆の人、今小路範成の息子、父の国事行為調査と名誉回復を求めて品川を頼る

（表4つづき）

DB2に登場する人物	経歴
大浦兼武◎	鹿児島出身、官僚・政治家、品川内相の下で警保局主事を務める
伊藤長次郎◎	兵庫県生、真宗信徒生命発起人、起業銀行株主、加古川銀行頭取、三十八銀行頭取、神栄社長、兵庫県農工銀行取締役など、伊藤家小作人信用組合を結成して経済援助を行う、高井幸三・豊永長吉とともに「宗教学校」設立を企図、貴族院議員
橋本峨山◎	天龍寺管長として天龍寺再興に尽力、品川も橋本に宛て多額の寄付を行う
鈴木馬左也◎	第3代住友総理事
光村弥三郎◎	光村家当主
田辺貞吉◎	明治14年住友入社以後、重役を歴任
革島瀬左衛門（※）◎	幕末に志士たちを止宿して支援した。また、品川と共に薩邸に潜伏し活動した経験有。明治14・32年には品川に奉職の世話を求める
高田慎蔵◎	アーレンス商会、ベア商会に勤め明治13年独立、21年高田商会設立、機械輸入販売業。越智通信の死後遺産処分問題で品川とともに奔走
杉孫七郎◎	表2参照
岡本碧嵓	篆刻家、楠公碑文を品川に依頼される
内藤小四郎☆◎	表1参照
辻忠三郎☆◎	表1参照
安盛善兵衛☆◎	表1参照
藤村岩次郎☆◎	表1参照
松村松寿◎	安盛善兵衛・辻忠三郎・藤村岩次郎・内藤小四郎・小林銀三とともに五二会京都綿ネル結成
小林銀三◎	安盛善兵衛・辻忠三郎・藤村岩次郎・内藤小四郎・松村松寿とともに五二会京都綿ネル結成
植山菊二郎◎	村田寂順代理人、積翠園の宮内省への献上について品川と村田の間を奔走
内海忠勝◎	長州出身、禁門の変に従軍、兵庫県知事、長野県知事、神奈川県知事、大阪府知事、京都府知事、会計検査院長、貴族院議員などを歴任
国重正文◎	長州出身、京都府大書記官、富山県令、同知事、内務省神社局長、国学院長、官幣中社稲荷神社宮司
鬼頭悌二郎◎	新潟出身、大蔵省、農商務省参事官（明治19）、後、ニューヨーク副領事、バンクーバー領事代理、27年退官して横浜銅伸社長
安生順四郎◎	表1参照
小松原英太郎◎	岡山生、『評論新聞』、『朝野新聞』記者、埼玉県知事、内務省警保局長、後内務次官、貴族院議員、大阪毎日新聞の社長
高畑千畝◎	京都生、女流歌人式部の後嗣、歌人、内務省に出仕、水戸税務署勤務、明治34年病のため退官に京都に戻り、古楽の研究に専念
中村喜之助◎	池田合名会社社員、美術信用組合設立にも奔走
平田東助☆◎	米沢出身、ロシア留学、内務省御用掛（明治9）のち大蔵省、品川とともに信用組合の日本普及を目指して活動

（※）革島瀬左衛門は、表3に登場する革島有尚と同一人物である（京都府立京都学・歴彩館所蔵「革嶋系図略［有尚筆］」〈「革嶋家文書」文書番号1716〉、「革嶋系図略写」〈「革嶋家文書」文書番号1766〉）。

註：経歴・記号は表1～3の註に掲載の諸史料のほか、国立国会図書館憲政資料室所蔵「川村正平関係文書」168-3、辻本仁兵衛編『帝国議会衆議院議員名鑑』（文栄社、1890年）、木戸照陽編『日本帝国国会議員正伝』（田中宋栄堂、1890年）、牧野元良編『大日本商工名鑑』（商業興信所、1899年）、『新聞名鑑』（日本電報通信社、1909年）、『信用名鑑』（信用名鑑発行所、1911年）、『通信協会雑誌』（294、1933年）、神根悊生『明治維新の勤王僧』（興教書院、1936年）、高瀬重雄「鳥尾得庵と明道協会の運動について」（『支那佛教史学』7-2、1943年）、江崎悌三「日本の現代昆蟲学略史――日本昆蟲学会 40 年の回顧」（『昆蟲』25、1957年）、友松円諦「在家仏教徒の活動」（法藏館編集部編『講座　近代仏教　第Ⅱ巻』法藏館、1961年）、衆議院・参議院編『議会制度七十年史　第11』（大蔵省印刷局、1962年）、吉池進『会津八一伝』（会津八一先生伝刊行会、1963年）、内貴甚三郎編刊『京華要誌　上・下』（『新撰京都叢書』8、1987年、原著は京都新繁昌記発行所刊、1903年）、歴代知事編纂会編『新編日本の歴代知事』（歴代知事編纂会、1991年）、豊田満広「明治十一年七月六日小和野廣人取調控」（『霊山歴史館紀要』12、1999年）、真辺将之「鳥尾小弥太における政府批判の形成」（『日本歴史』657、2003年）、三崎一明「高嶋鞆之助　大正5年1月11日」（『追手門学院大学教育研究所紀要』31、2013年）、Janine Anderson SAWADA,〔1998〕'Political Waves in the Zen Sea: The Engaku-ji Circle in Early Meiji Japan' *Japanese Journal of Religious Studies* 25-1/2を参照した。多くの省にまたがる経歴を持ち、大臣経験も豊富な者の経歴については単に「政治家」とした。衆議院議員経験者については「衆（回次）」と記した。経歴は後掲図1に必要な限りについて簡潔に記載し、一般的知名度が高いと思われる人物についてはより簡略化した。

表5 〔1893年晩春〕品川弥二郎の京阪神滞在・詳細（明治26年4月26日～5月7日）

月日	品川の動向	出典
4月25日	国民協会総会終了後、汽車で京都に向かう	「懐中日記」M26
4月26日	尊攘堂に来着、宿泊	「懐中日記」M26
4月27日	神戸着、野村公使を西常盤楼に訪問 後、光村宅を訪問、宿泊	「懐中日記」M26
4月28日	光村弥兵衛の墓詣りの後、天岡温泉に行き、光村宅に宿泊	「懐中日記」M26
4月29日	和田維四郎と同道し、但馬遊園会に行く 〔神戸市〕北区若松町伝法家に投宿 佐々〔友房〕、広瀬〔満正ヵ〕、山下来訪	「懐中日記」M26
4月30日	〔神戸市〕北区警察署長広沢鉄郎と面会 御料局〔生野支庁附属大阪〕製錬所を拝観 夜京都に戻り、寺町文求堂に投宿	「懐中日記」M26
5月1日	赤松連城を訪問、その後西本願寺に参詣し、法主〔大谷光尊〕に面会、香川〔葆晃〕、水本、赤松来会 帰途、博物館建築場を片山〔東熊ヵ〕の案内で巡視 夕方、梅州山人来訪 夜、大洲鉄然来訪	「懐中日記」M26
5月2日	朝、大洲鉄然来話 堀のもとに添書を求めて来訪 越智〔通信ヵ〕・片山と同道し、森〔寛斎〕を訪問の後、博覧会場に行く	「懐中日記」M26
5月3日	終日尊攘堂にて書類の整理	「懐中日記」M26
5月4日	松方〔正義〕を常盤楼に訪問 松本〔鼎〕を訪ね、豊村楼にて午餐 阿武〔素行〕、一得庵〔鳥尾小弥太〕、並河〔靖之〕、植治〔小川治兵衛〕、飯〔飯田新七〕、池清〔池田清助〕、林〔新助〕等と面会し、松本とともに帰宅 この日出発する予定であったが、寒気のため延引する 夜、森〔寛斎〕が訪問	「懐中日記」M26
5月5日	二番汽車にて静岡に向けて出発、松本〔鼎〕・阿武〔素行〕・横田〔萬寿之助〕、石田が見送る	「懐中日記」M26
5月7日	帰京	『東朝』明治26年5月9日

註：以下、表5～7の「出典」に関しては、本文「序章」末尾に凡例のあるものを除き、以下の略称を用いる。「懐中日記」M26・M28→「明治廿六年　懐中日記」・「明治廿八年　懐中日記」（「品川文書1　書類」R76-1584・R76-1585-1、2）、『東朝』→『東京朝日新聞』。人名には下線を付した。人名のうち、姓のみのもの、および略称で書かれてあるものについては、筆者が特定し、〔　〕内に補った。

表6 〔1893年夏〕品川弥二郎の京阪神滞在・詳細（明治26年8月7日～9月12日）

月日	品川の動向	出典
8月7日	早朝、京都七條に到着、直に島地黙雷を訪問、赤松連城に面会、高島と面会 尊攘堂に入る	「懐中日記」M26
8月8日	小田佛乗来訪 代々木等へ数通手紙を出す	「懐中日記」M26
8月9日	早朝、阿武〔素行〕を訪問、松本〔鼎〕その他同道し、霊山〔招魂社〕を参詣 その後松本宅に集会し、〔禁門の変〕三十年祭の手続き等を決める	「懐中日記」M26
8月10日	7時、七條停車場を出発、午後5時、尾道濱吉楼に到着〔そこから広島、山口に滞在〕	「懐中日記」M26
8月頃	平賀義夫から尊攘堂に物品が献納され、品川よりその返礼として吉田松陰真蹟の模本・葉桜日記等が贈られる 同時に、品川より平賀・小野村に「女丈夫直婦」が紹介される	『品川文書』6、69～70頁
9月1日	有栖川宮を舞子別荘に訪問 午後2時、神戸発、朝日麦酒会社を巡視し、京都着	「懐中日記」M26
9月2日	終日5日の祭典に展覧する書類を調査	「懐中日記」M26
9月3日	毛利〔元昭〕が柏村〔信〕・神代〔貞介〕を従えて来訪、昔語りをする 毛利公の招きで吉富屋にて晩餐することになる 〔この時の来堂をきっかけに、毛利・柏村・神代はそれぞれ尊攘堂に寄付することになったものと思われる〕 地鎮祭にて市内は騒々しい	「懐中日記」M26
9月4日	弥一を天王山の墓に遣わす 渡辺昇・岩村〔高俊〕・石田知事等来訪 午後より〔禁門の変〕三十年祭事務所に行く	「懐中日記」M26
9月5日	〔禁門の変〕三十年祭祭典を東山霊山招魂場にて挙行、有栖川宮・山科宮等参拝、そのほか参拝者多数	「懐中日記」M26
9月6日	終日尊攘堂の書類調査	「懐中日記」M26
9月7日	森寛斎米寿の祝いが博覧会場で開かれ、出席 外出中に綴喜郡の松田芳次郎が尊攘堂来訪 午後帰堂	「懐中日記」M26、『品川文書』7、96～98頁
9月8日	終日来客対応、松田芳次郎より書簡（差出月日、トンヤレ節を一部所望）	「懐中日記」M26、『品川文書』7、96～98頁
9月9日	終日来客対応	「懐中日記」M26
9月10日	書類調査	「懐中日記」M26
9月11日	書類整理	「懐中日記」M26
9月12日	豊永〔長吉〕、谷原とともに西本願寺に行き、飛雲閣その他を拝観 夜、汽車にて帰京	「懐中日記」M26

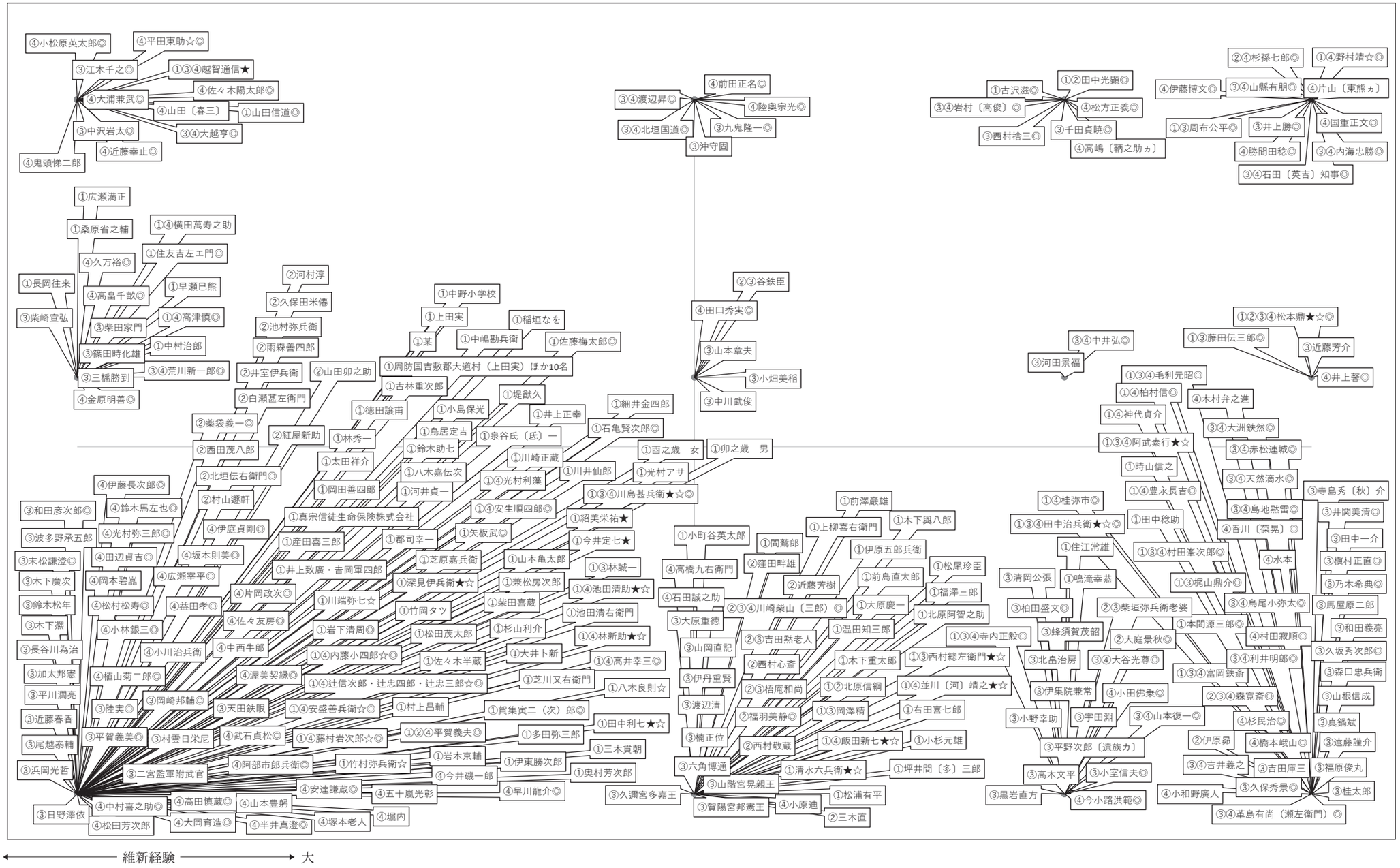
表7 〔1895年夏〕品川弥二郎の京阪神滞在・詳細（明治28年6月10日～8月16日）

月日	品川の動向	出典
6月10日	汽車で京都に向かう	「懐中日記」M28、「品川文書2」51-6
6月10日～8月15日	尊攘堂にて川崎三郎と維新談、不在時川崎を滞在させる	『品川文書』3、207～208頁
6月12日	尊攘堂より九段の妻・静子に書簡にて安着を知らせる、光村家の多田〔弥三郎〕に手紙を遣わし京都に来るよう伝えたこと、広瀬のことも訪ねること 野村靖に書簡、京都に滞在のこと、博覧会開催期間中には尊攘堂も一般公開すること	「品川文書2」51-6、「野村靖関係文書」R2-5-8
7月1日	大洲鉄然より書簡（差出月日）、7月21日～23日に築地別院にて征清戦死・病没者追弔法会を行うこと	『品川文書』2、269頁
7月6日	京都で開催された窯業協会第三回総会で演説	『品川子爵伝』年譜
7月7日	安達謙蔵より書簡（差出月日）	『品川文書』1、213～214頁
7月12日～	尊攘堂を一般公開、来堂者は数百名に及ぶ	明治28年7月14日『日出新聞』
7月16日	豊永〔長吉〕、桂〔弥一〕とともに丹波金剛院の円山応挙の絵を見る 大岡〔育造〕、柴山〔川崎三郎〕来着	「懐中日記」M28
7月17日	〔御料局〕佐々木陽太郎来訪	「懐中日記」M28
7月21日	伏見に行き、山城紅茶伝習生卒業式に臨む 寺田屋建碑地を見学し、澤文支店新築楼上で花火を見る 夜、宇治萬屋に投宿	「懐中日記」M28
7月22日	朝9時出発前、観音院山門前で農業団体諸氏7、80名と写真撮影する 21日より同行していた按摩師・福原謙、小林善四郎とともに宇治を出発 午後2時、奈良角屋（対山館）に到着 夜まで大仏等を参拝、奈良公園内を拝観 山田〔春三〕書記官、川上〔親晴〕警部長、福原〔鐐二郎〕参事官、正木税務署長、荒井〔賢太郎〕収税長等来訪	「懐中日記」M28
7月23日	知事・正木・荒川とともに奈良を出発、上市の北村又左衛門宅に到着、後見人・北村宗四郎ほか30名ほど来訪、特別税の不可論を聞く 北村宅に投宿、林業の談話等をして過ごす	「懐中日記」M28
7月24日	午後、吉野山に登り、蔵王堂等を拝観する 黄昏に入り北村宅に帰る	「懐中日記」M28
7月25日	北村宅を出発、壺阪観音に参詣し、奈良町に帰着 白根〔専一〕内蔵頭が今夜来着の知らせに接する 福原・小林に白根のことを託し、土倉に雨のため帰宅することを伝えて辞去 夕刻、白根を菊水館に迎える	「懐中日記」M28
7月26日	白根・税所〔篤〕・古沢〔滋〕が同行し、大仏・正倉院・尊王院御庫等を拝観 午後、頭痛のため外出を避け、大和絣製造者等19名と面会する	「懐中日記」M28
7月27日	白根・古沢・福原参事とともに奈良を発し、橿原神宮を参詣、法隆寺を拝観して汽車に乗る 大阪を経て夜尊攘堂に帰る	「懐中日記」M28

（表7つづき）

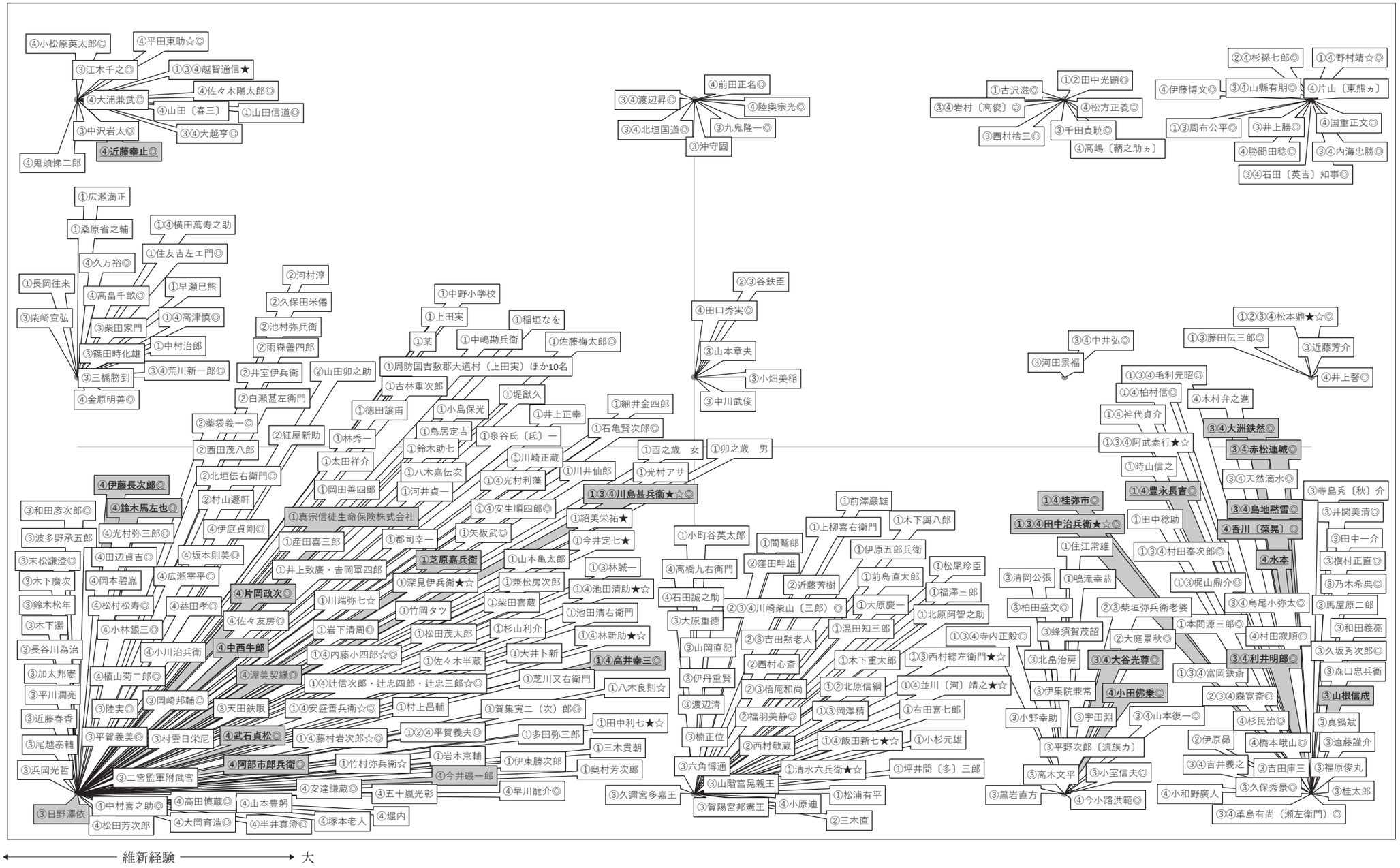
月日	品川の動向	出典
7月28日	夕方5時、生庄に行き、勝間田〔稔〕・国重〔正文〕来会、「五か条憲内法」の宴を開く 夜12時尊攘堂に帰る	「懐中日記」M28
7月29日	午後から〔第四回内国勧業〕博覧会を巡視	「懐中日記」M28
7月30日	〔光村家〕多田弥三郎来訪 「塚本老人」来訪	「懐中日記」M28
7月31日	終日来客対応 「塚本老人」早朝に来訪 山田〔春三〕奈良県書記官来訪	「懐中日記」M28
8月1日	在京都各府県博覧会委員に京都の土産とするため、辻〔信次郎〕に頼み、虎の巻30部を譲り受ける このほか川島甚兵衛より10部余譲渡のはず	「懐中日記」M28
8月13日	午前、京都発	「懐中日記」M28
8月16日	朝8時新橋着	「懐中日記」M28

図1-1　維新経験―官歴マトリクス



註：③の参拝者の経歴については、表1・2・4註に記載した諸史料を参照した。

図1-2　維新経験―官歴マトリクス（付・真宗関係者マーカー）

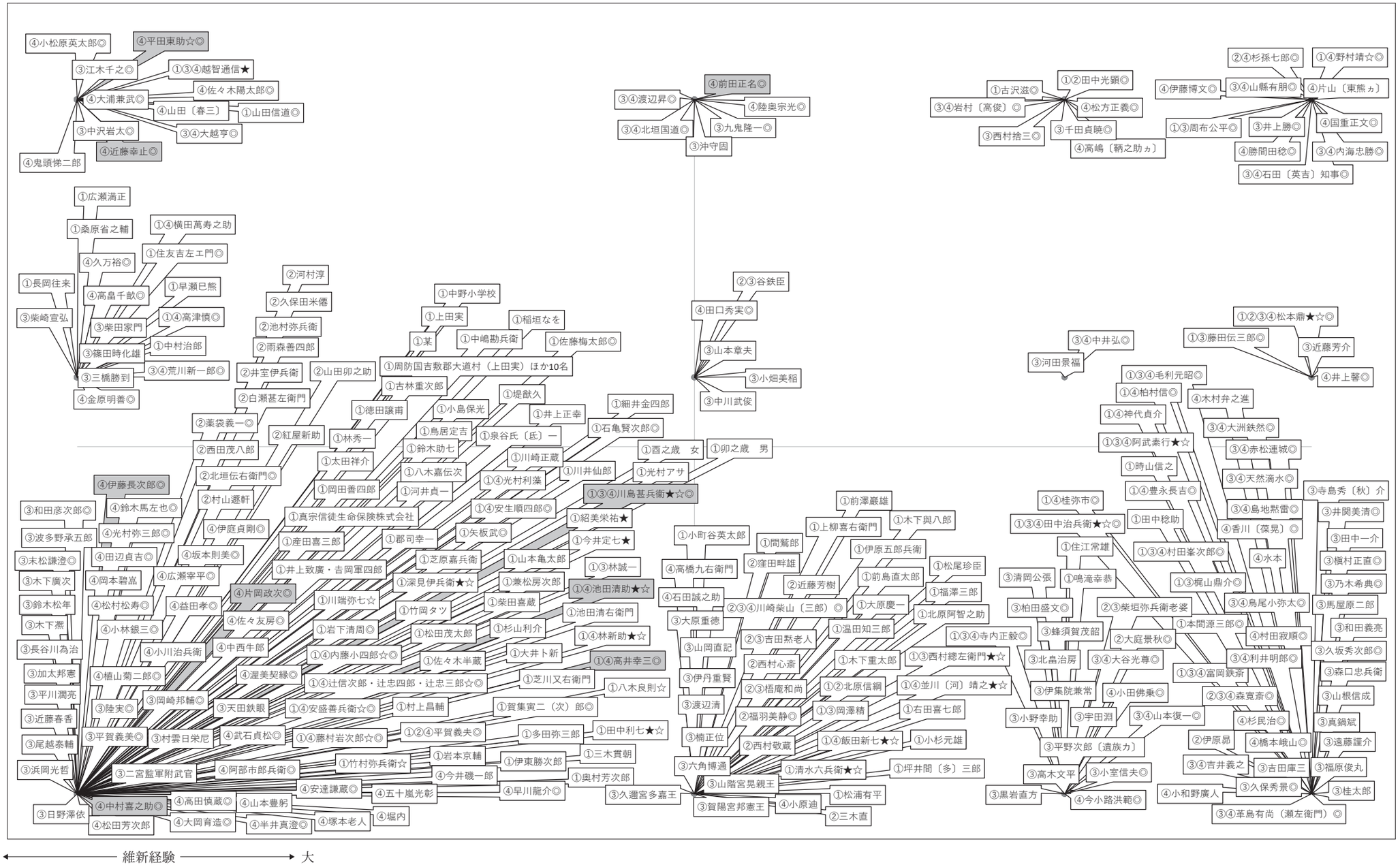


註1：「真宗関係者マーカー」は浄土真宗僧侶・門信徒であることが明確にわかる者、およびその協力者であることが明確にわかる者に付した。

註2：網掛け＋太字＋下線があるものは本願寺派、網掛けのみは大谷派を指す。

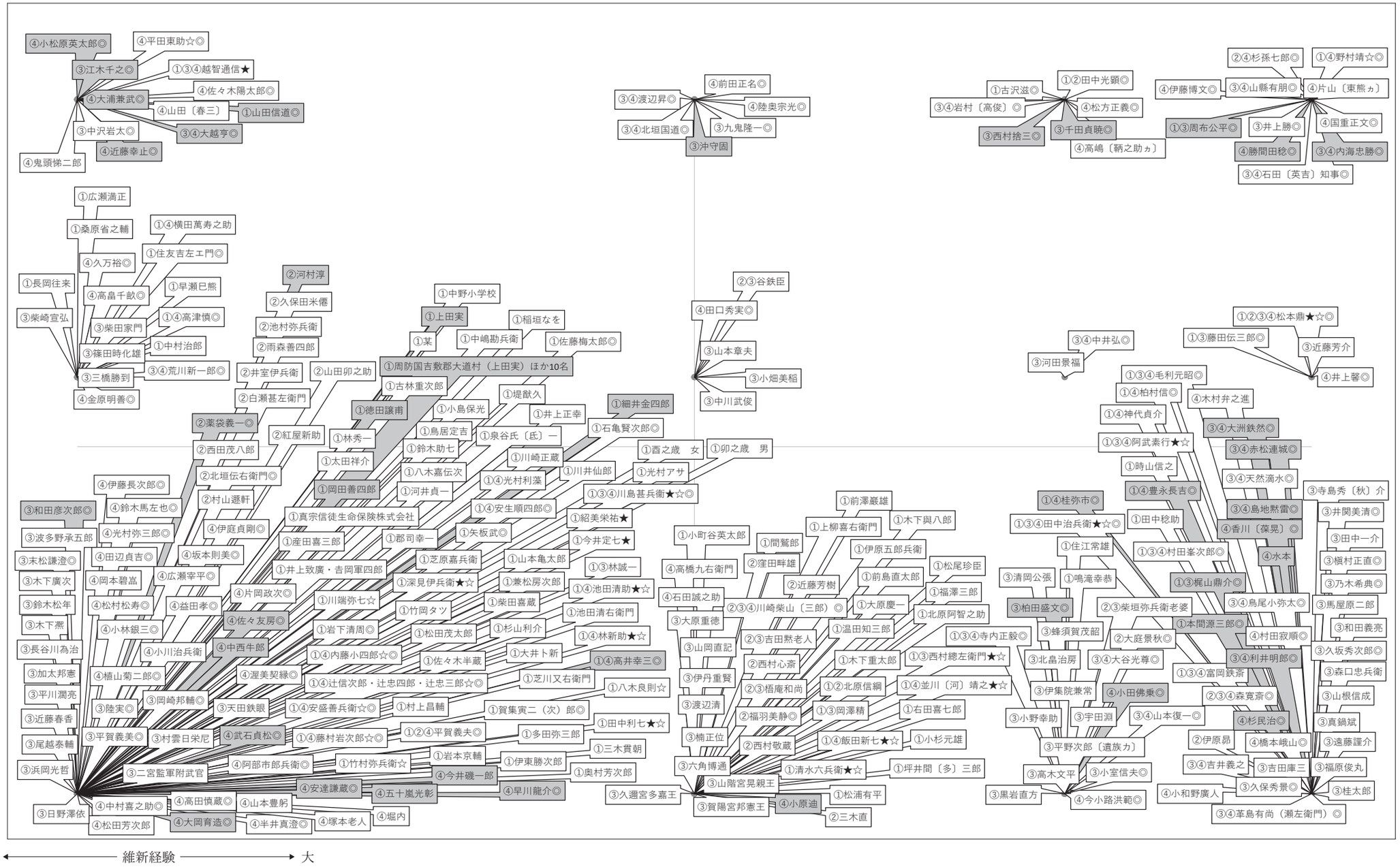
註3：判断の根拠となる史料は、表1～4の註に記載の各文献等のほか、彦根正三編『華族名鑑　明治25年10月版』（博公書院、1892年）を参照した。

図1-3　維新経験―官歴マトリクス（付・信用組合マーカー）



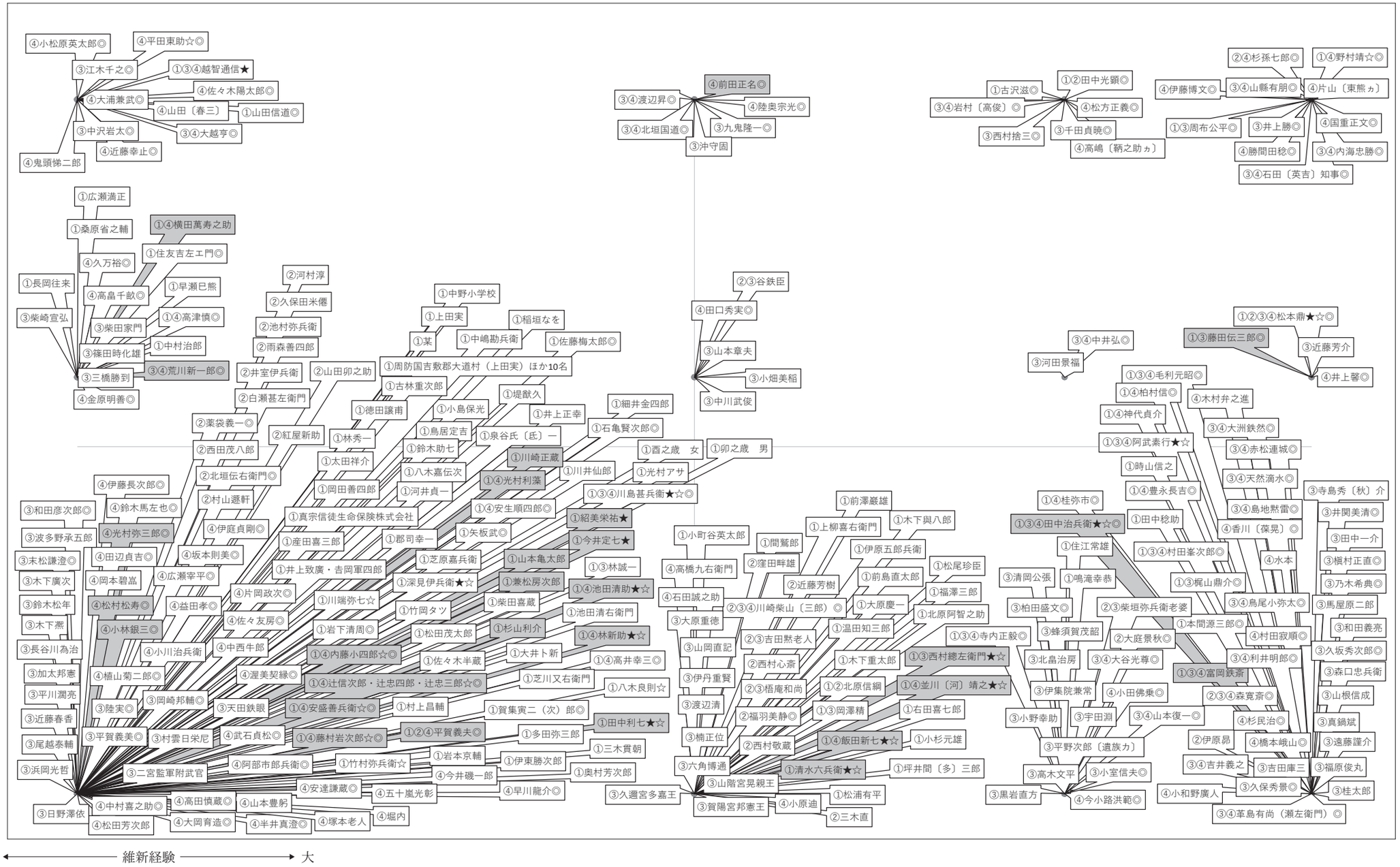
註：「信用組合マーカー」は信用組合結成に関わったことが明確にわかる者、その協力者であることことが明確にわかる、
あるいはそのように思われる者に付した。判断の根拠となる史料は、表１～４の註に記載の各文献等。

図1-4　維新経験―官歴マトリクス（付・国民協会マーカー）



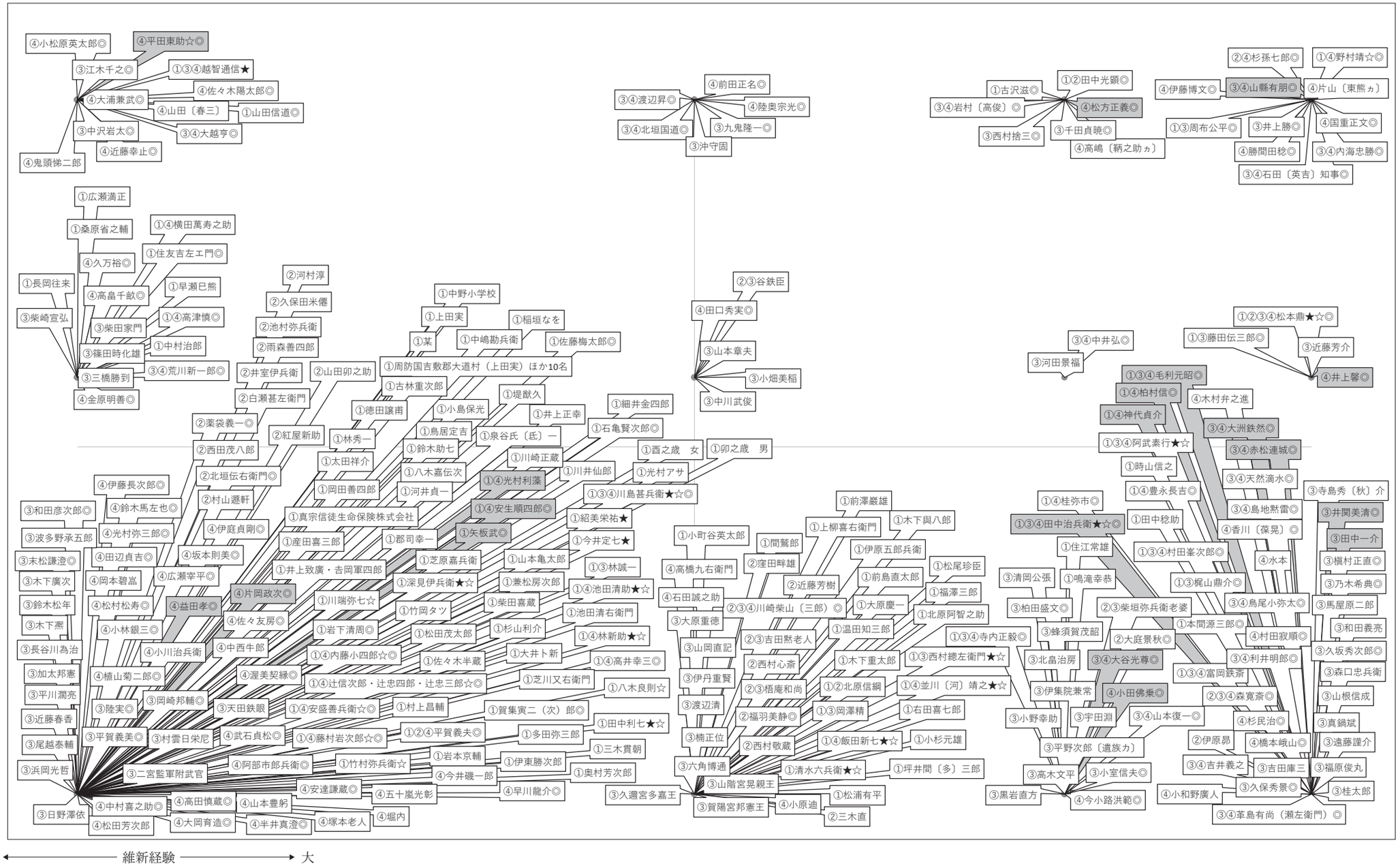
註：「国民協会マーカー」は会員であることが明確にわかる者のほか、支持者であることが明確にわかる者、およびそのように思われる者、旗色はそれほど明瞭ではないが選挙においては「国民派」であると判断できる者、選挙協力を行った者などに付した。判断の根拠となる史料は、表１～４の註に記載の各文献等。

図1-5　維新経験―官歴マトリクス（付・五二会マーカー）



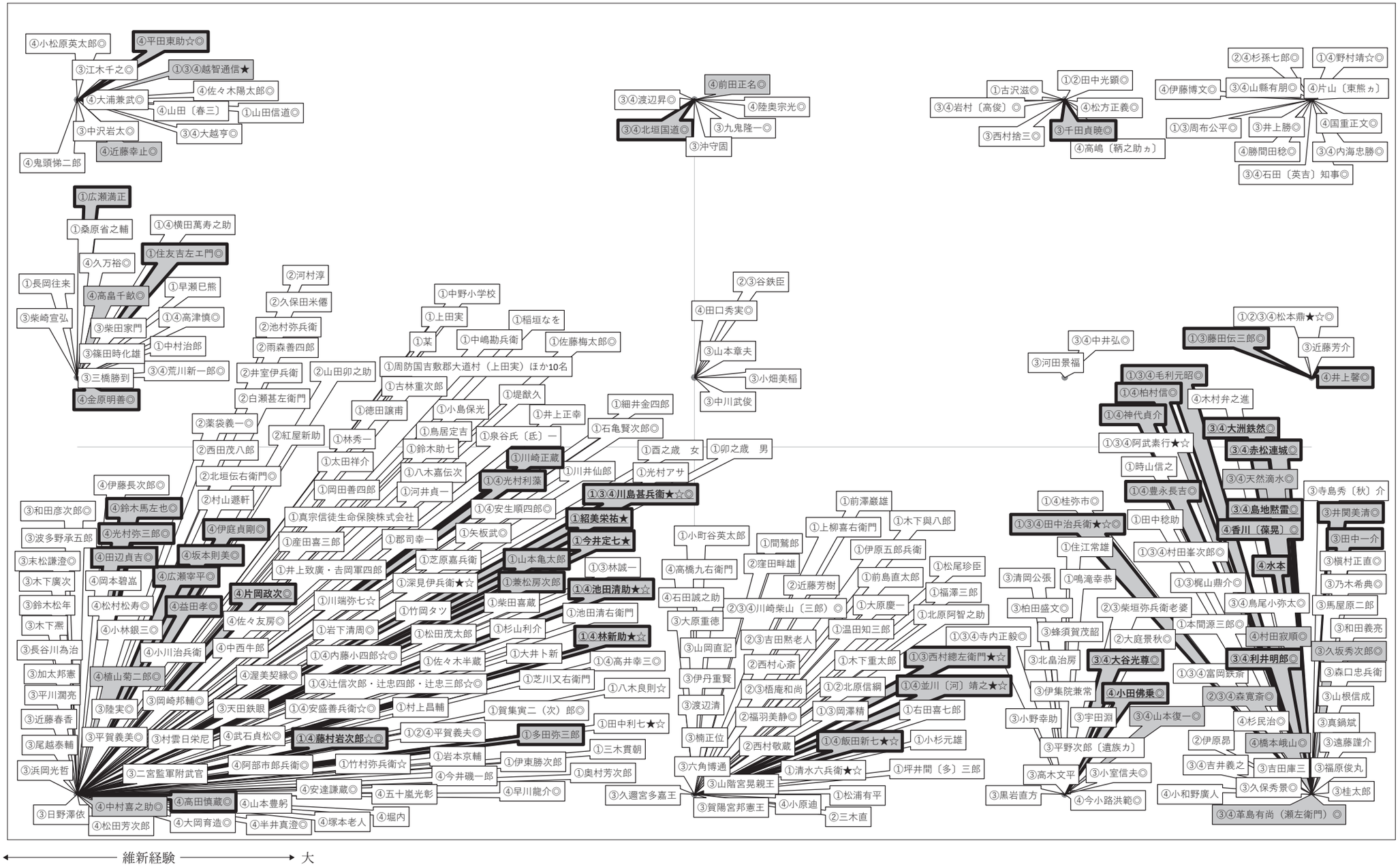
註：「五二会マーカー」は五二会員と明確にわかる者、および前田正名と個人的に関係がある者に付した。判断の根拠となる史料は、表１～４の註に記載の各文献等のほか、京都府立京都学・歴彩館所蔵、五二会中央本部編刊『京都五二会大会報告』（1894 年）を参照した。

図1-6　維新経験―官歴マトリクス（付・品川家農牧場マーカー）



註：「品川家農牧場マーカー」は品川家農牧場の経営・管理に直接携わる者、および農牧場所在地に活動の拠点を置く者、品川家農牧場経営の協力者（および協力者集団の構成員）であることが明確にわかる者に付した。判断の根拠となる史料は、表1～4の註に記載の各文献等のほか、彦根正三編『華族名鑑 明治25年10月版』（博公書院、1892年）を参照した。

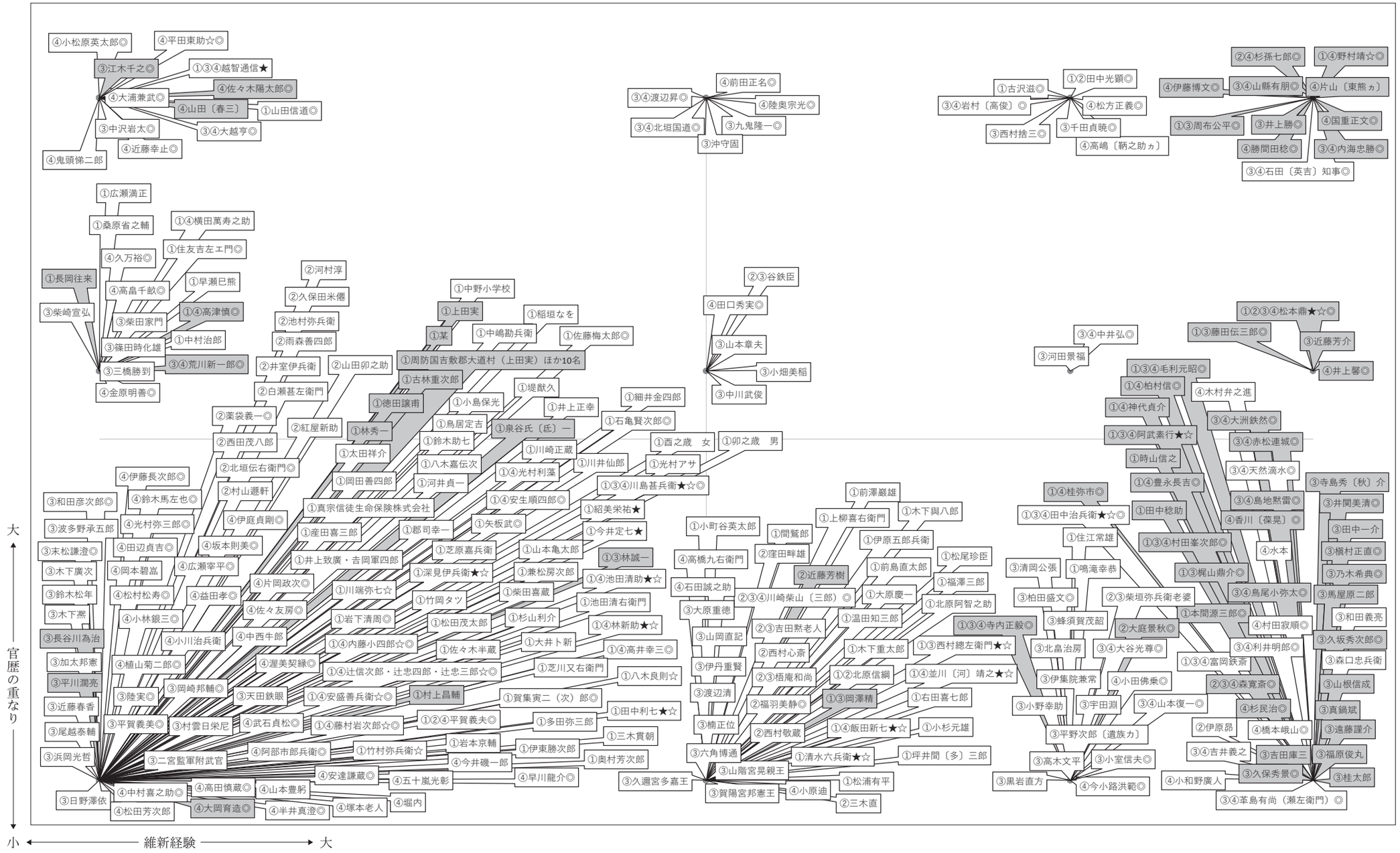
図1-7　維新経験―官歴マトリクス（付・支援被支援マーカー）



註1：品川に対して／品川を介して／品川を介さず同一平面上の人物に対して支援者の立場にあったことが明確にわかる、あるいはそのように思われる者には網掛け＋太枠、品川から直接に／品川を介して／品川を介さずに同一平面上の人物に対して被支援者の立場にあったことが明確にわかる、あるいはそのように思われる者には網掛けのみ、支援者・被支援者のいずれでもあったことが明確にわかる、あるいはそのように思われる者には網掛け＋太字＋下線＋太枠で表現した。

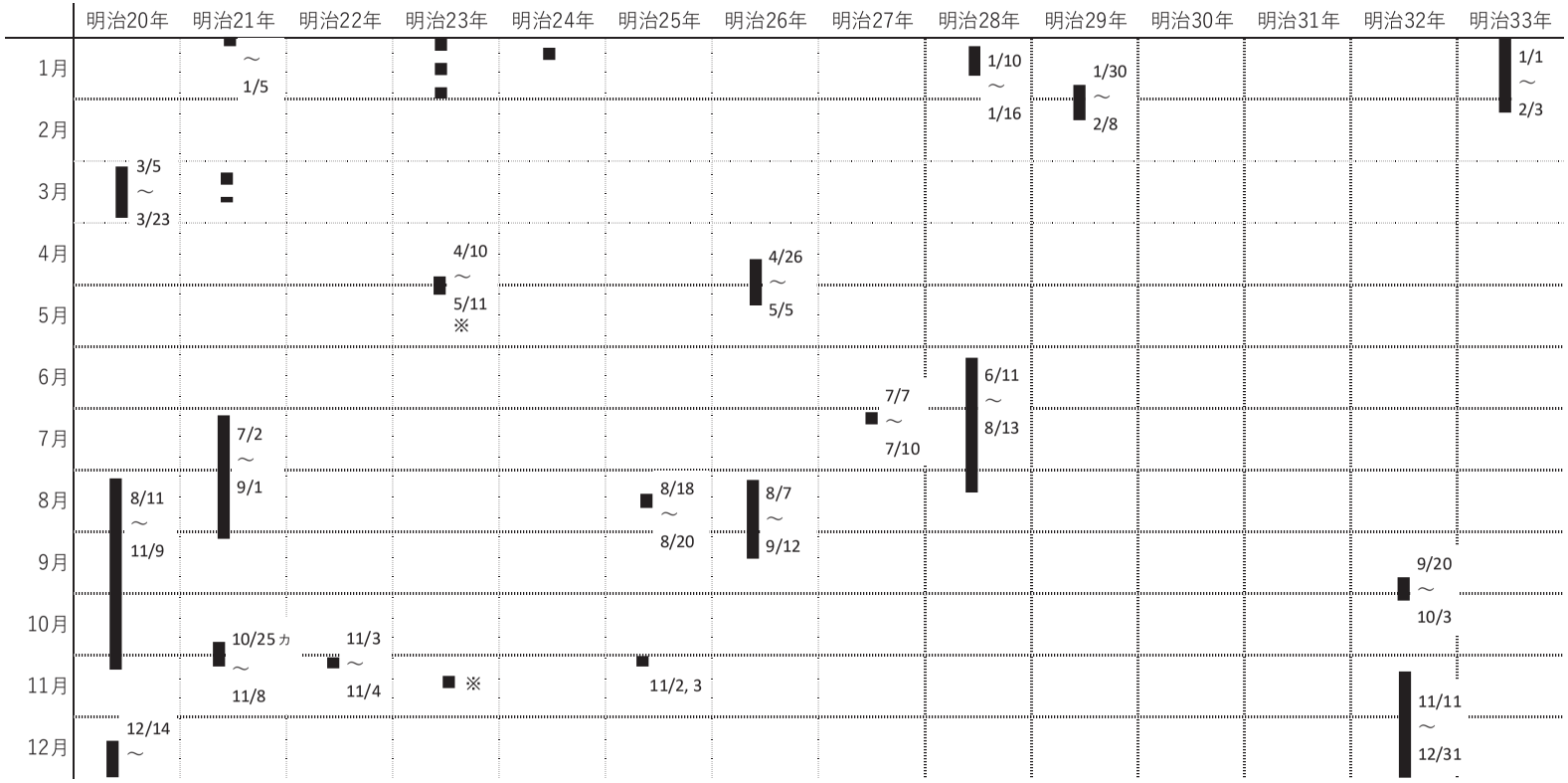
註2：判断の根拠となる史料は、表1～4の註に記載の各文献等のほか、彦根正三編『華族名鑑 明治25年10月版』（博公書院、1892年）を参照した。

図1-8　維新経験―官歴マトリクス（付・山口出身者マーカー）



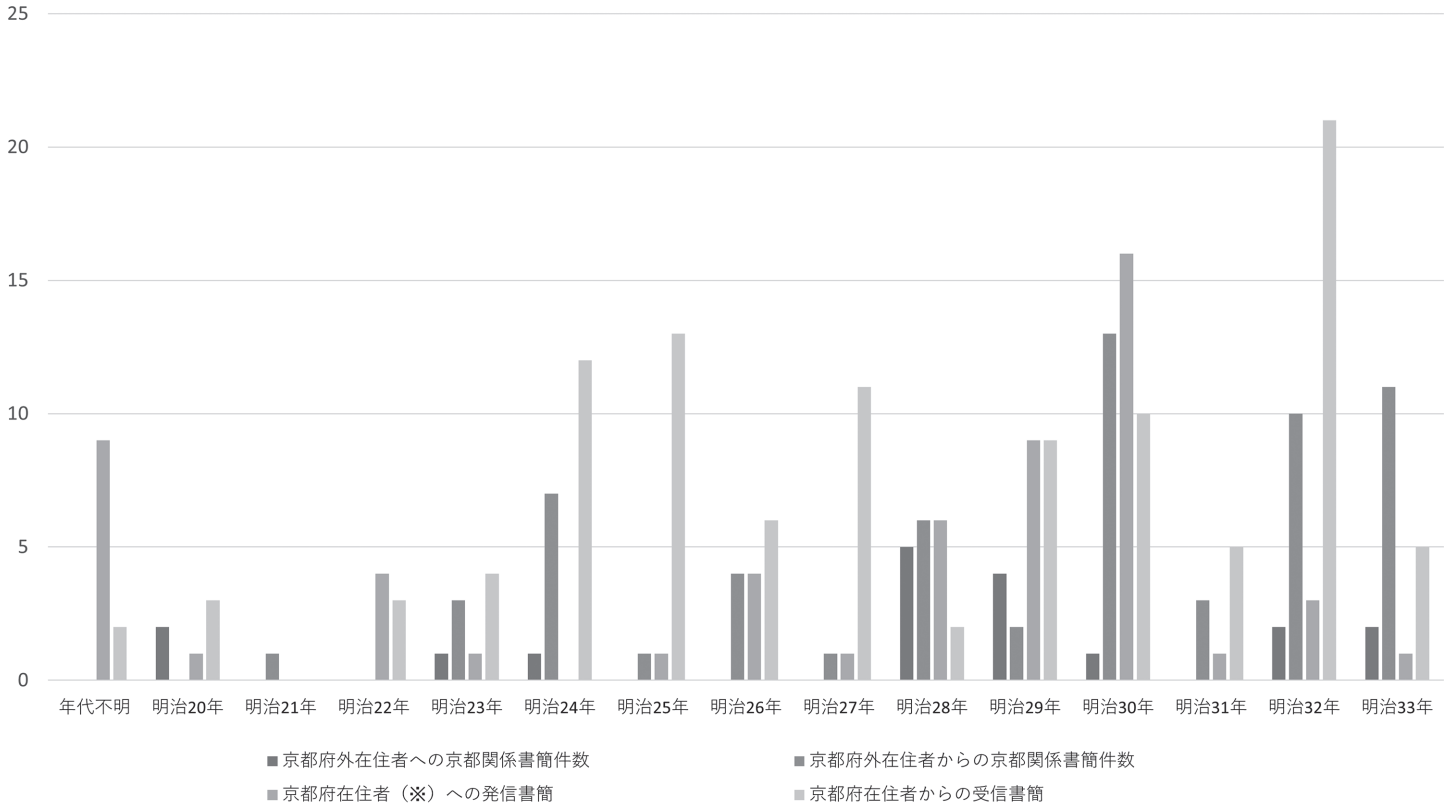
註：判断の根拠となる史料は表１～４の註に記載の各文献等。生まれは他地域でも養子縁組により幼少期・青年期に山口人（萩藩士）となった者、および山口で幼少期を過ごした者は「山口出身者」とした。

図2　品川弥二郎の京都滞在日



註：京都発着日が明確なものは図中に記載するとともに実線で示し、はっきりしない時期については破線で示した。※印を付したものは、関西地方に出張等で滞在した期間を示すものであり、その途次京都に滞在したことが判明するもののその期間は明らかでない。

図3　品川発受京都関係書簡件数



註1：書簡原本が残っていないか、あるいは確認できない場合でも、品川が発送した事実が確認できるものは一件とした。
註2：弥一宛書簡も含む。
註3：封筒のない書簡については、宛名書き等で所在地が判明するもののみを対象とした。
註4：明治20年以前と明確にわかるものは対象外とした。
（※）「京都府在住者」には、京都府内に本社を置く会社の役員・従業員も含む。